

筑後市内遺跡群XIV

福岡県筑後市大字羽犬塚・徳久・山ノ井所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第98集

2011

筑後市教育委員会

筑後市内遺跡群XIV

2011

筑後市教育委員会

序

本書は、平成 21 年度に発掘調査を行った羽犬塚山ノ前遺跡・徳久北原遺跡・山ノ井南野遺跡の調査の記録です。

羽犬塚地区・徳久地区・山ノ井地区は、市街地の中心部にあたり、古代においても西海道が通り、駅家が置かれるなど、政治と交通の拠点でありました。これまでの調査でも、奈良時代の集落や、駅家の関連施設とみられる建物跡が多数確認されています。

今回の調査では、徳久北原遺跡で古代の集落跡、山ノ井南野遺跡で中世の溝、羽犬塚山ノ前遺跡で近世の道路跡が確認され、各時代における人々の営みの一端を垣間見ることができました。

これらの成果が今後の地域史研究の発展に寄与することを期待します。また、本書が地域における文化財保護への理解を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、多大なご協力を賜りました関係者の方々に心より御礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

筑後市教育委員会
教育長 高巢一規

例言

1. 本書は平成 21 年度に筑後市教育委員会が国庫補助事業として行った羽犬塚山ノ前遺跡第 3 次調査、徳久北原遺跡第 1 次調査、山ノ井南野遺跡第 7 次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第 I 章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構図は羽犬塚山ノ前遺跡を吉村由美子、徳久北原遺跡を小林勇作、山ノ井南野遺跡を上村英士が作成し、遺物実測は横井理絵・上村が行った。また、図版浄書は整理委託事業として(株)埋蔵文化財サポートシステムが行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は小林・上村・吉村が行った。
5. 今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第 II 座標系(世界測地系)を基準としている。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による(筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2002 に準拠している)。
SB - 掘立柱建物 SI - 竪穴住居 SD - 溝 SK - 土坑 SP - ピット SX - 不明遺構
7. 本書の執筆は羽犬塚山ノ前遺跡を吉村、徳久北原遺跡を小林、山ノ井南野遺跡を上村が行った。また、編集は吉村が行った。

目次

I . 調査経過と組織	1
II . 位置と環境	3
III . 調査成果	
羽犬塚山ノ前遺跡 3 次	4
徳久北原遺跡	6
山ノ井南野遺跡第 7 次	20

写真図版

I . 調査経過と組織

羽犬塚山ノ前遺跡第3次調査地点は、筑後市大字羽犬塚字山ノ前に所在する。平成21年3月に開発原因者である若佐和彦氏より当該地について試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課が現地での確認調査を実施した。確認調査の結果、当該地全体で遺構が検出されたため、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。当該地のうち建築部分にあたる約72㎡について本調査を実施することで合意し、国・県・市の補助事業として調査を行うこととなった。

徳久北原遺跡は、筑後市大字徳久字北原に所在する。平成20年10月に土地所有者である森幸子氏より試掘・確認調査依頼が筑後市教育委員会に提出され、担当課である社会教育課が確認調査を実施した。確認調査の結果、当該地の西側において遺構が確認されたため、開発による埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、遺構が存在しない擁壁新築部分以外の建築部分約140㎡について本調査を実施することで合意し、国・県・市の補助事業として調査を行うこととなった。

山ノ井南野遺跡第7次調査地点は、筑後市大字山ノ井字南野に所在する。宅地分譲に伴い、平成20年4月に土地所有者である大津早苗氏より分譲地全体について試掘・確認調査依頼が提出され、社会教育課が試掘調査を行ったところ、対象地の一部において遺構が検出されたため、開発による埋蔵文化財の取り扱いについては個別に協議することとした。その後、遺構が確認された区画について平成21年9月に開発原因者である山口雄三氏と協議を行い、建築部分にあたる約70㎡について本調査を実施することで合意し、国・県・市の補助事業として調査を行うこととなった。

【調査組織】

1. 平成20年度（事前審査）

総括	教育長	城戸 一男
	社会教育部長	田中 僚一
庶務	社会教育課長	永松 三夫
	文化スポーツ係長	田中 純彦
	文化スポーツ係 (文化財担当)	永見 秀徳（試掘調査担当） 小林 勇作 上村 英士 吉村由美子（囑託：試掘調査担当）

2. 平成21年度（事前審査・本調査）

総括	教育長	城戸 一男
	協働推進部長	田中 僚一
庶務	社会教育課長	山口 辰樹
	社会教育係長	田中 純彦
	社会教育係 (文化財担当)	小林 勇作（徳久北原遺跡本調査担当） 上村 英士（山ノ井南野遺跡本調査担当） 吉村由美子（羽犬塚山ノ前遺跡本調査担当）

3. 平成22年度（整理作業及び報告書作成）

総括	教育長	高巢 一規
	協働推進部長	山口 辰樹
庶務	社会教育課長	高井良清美
	社会教育係長	馬場 信二

社会教育係 小林 勇作（徳久北原遺跡整理・報告書担当）
（文化財担当） 上村 英士（山ノ井南野遺跡整理・報告書担当）
吉村由美子（羽犬塚山ノ前遺跡整理・報告書担当）

4. 発掘調査参加者

（羽犬塚山ノ前3次）今山三咲子・植田 勝子・河添 幸子・堤 義弘・馬場千鶴子
（徳久北原遺跡）今山三咲子・加藤 礼子・蒲池 京子・隈本 干城・田島 好江
田平 利彦・中村 富男・馬場千鶴子・木村 弘年
（山ノ井南野7次）今山三咲子・加藤 礼子・蒲池 京子・隈本 干城・田島 好江
田平 利彦・中村 富男・馬場千鶴子・木村 弘年

5. 整理作業参加者

境 秀代・野口 晴香・野間口靖子・横井 理絵

調査及び整理作業に際しては次の方にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。（敬称略）

齋部 麻矢（福岡県教育委員会）

Ⅱ. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域には果樹園や茶畑、東部には米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

今回報告する遺跡が所在する羽犬塚・徳久・山ノ井地区は、市域の中央部、標高15mほどの低地に立地する。

周辺では主に古代に属する遺跡を中心に、古墳時代～近世までの遺跡が確認されている。山ノ井南野遺跡では古墳時代後期に比定される大溝が検出された。また、古代においては今回の3調査地点に近接して西海道が通ると推定され、周辺では羽犬塚山ノ前遺跡、山ノ井南野遺跡、山ノ井川口遺跡で道路遺構が確認されている。その他、羽犬塚中道遺跡や羽犬塚射場ノ本遺跡で住居群を検出した。特に羽犬塚中道遺跡では「郡符葛□」「東」等の墨書土器が出土しており、周辺は古代官道に関連する駅家等の施設の存在が想定される地域である。

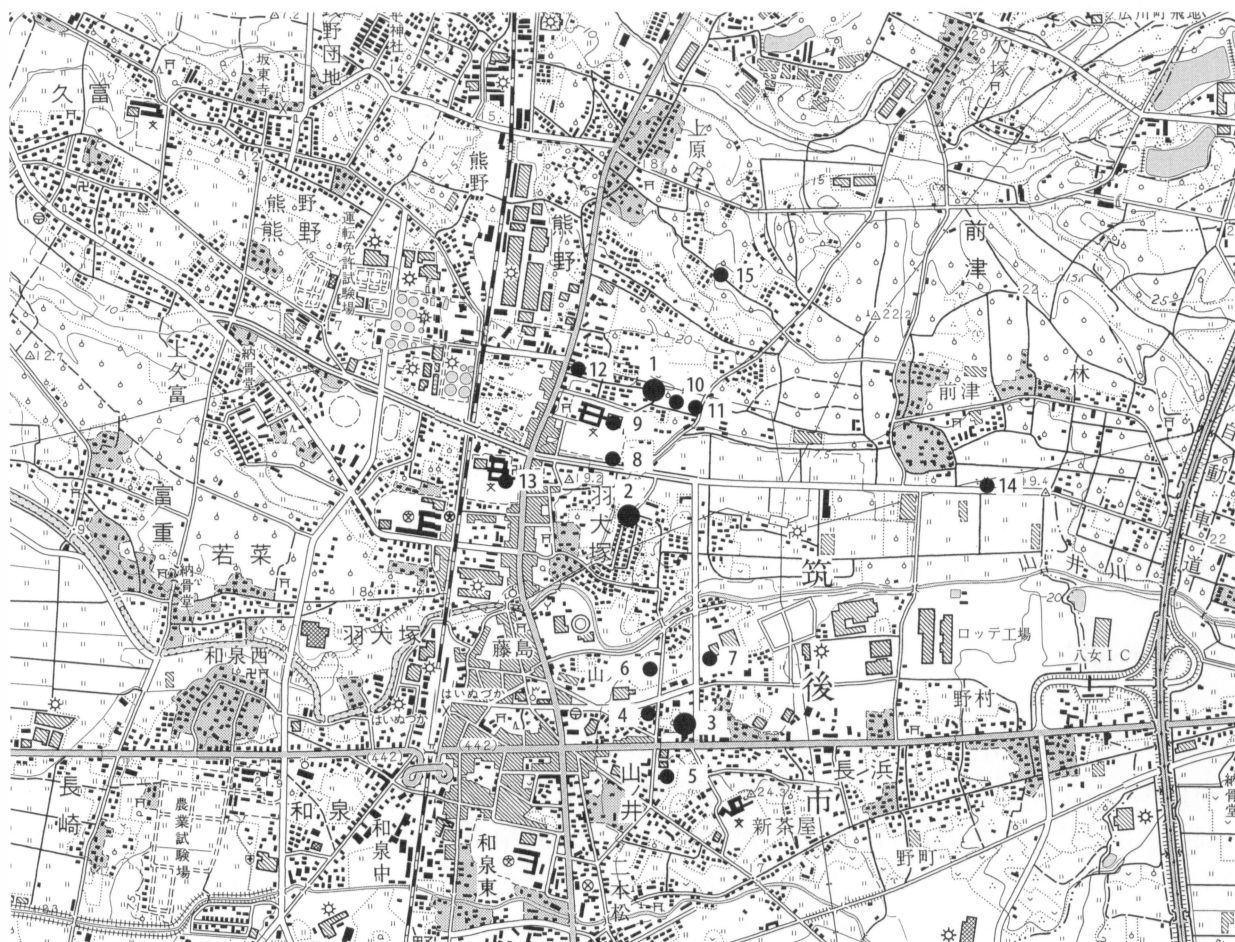


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 羽犬塚山ノ前遺跡(第3次) 2. 徳久北原遺跡 3. 山ノ井南野遺跡(第7次) 4. 山ノ井南野遺跡(第3・4次) 5. 山ノ井南野遺跡(第5・6次) 6. 山ノ井川口遺跡(第1・2次) 7. 徳久中牟田遺跡 8. 羽犬塚射場ノ本遺跡(第1～4次) 9. 羽犬塚中道遺跡(第1～5次) 10. 羽犬塚山ノ前遺跡(第1・2次) 11. 前津丑ノマヤ遺跡 12. 羽犬塚源ヶ野遺跡 13. 羽犬塚寺ノ脇遺跡 14. 前津柳ノ内遺跡 15. 前津中ノ玉遺跡

Ⅲ．調査成果

1. 羽犬塚山ノ前遺跡第3次調査



Fig.2 調査地点位置図 (1/2500)

(1) はじめに

建築部分にあたる約 68 m²に調査区を設定した。調査は吉村が担当し、平成 21 年 5 月 7 日より開始した。遺構の掘削は表土から遺構面までを(有)徳光建設に委託し、遺構面からは地元作業員による手作業の掘削を行い、平成 22 年 5 月 26 日に調査を終了した。

(2) 検出遺構

溝

3SD01 (Fig.3、Pla.1)

調査区北半で検出した。幅 1.3m を測り、深さは平均 0.1m ほどの浅い溝である。埋土は黒褐色土で、上部に淡黒褐色土、淡白茶色土の硬化土が載る。溝の北側に幅 0.4 ~ 0.8m、深さ 0.2 ~ 0.9m の緩やかな段状の窪み部をもつ。窪み部は断面逆台形を呈し、灰褐色粘質土を基調とする埋土である。窪み部は浅い溝を切り込んでおらず、窪みが埋まった後に浅い溝が形成されたと考えられる。土師器(細片)、石器(石鏃)が出土している。

(3) 小結

3SD01 は出土遺物が乏しく時期決定の要素に欠けるが、第 2 次調査において同方向の道路跡が検出されており、これは層位や出土遺物から近世に比定される。3SD01 はこの道路の側溝と幅、深さ等も近似しており、同一の遺構と考えられる。溝の上部及び周辺には帯状の硬化部分が認められ、側溝埋没後も生活道路として使用されていた状況が窺える。

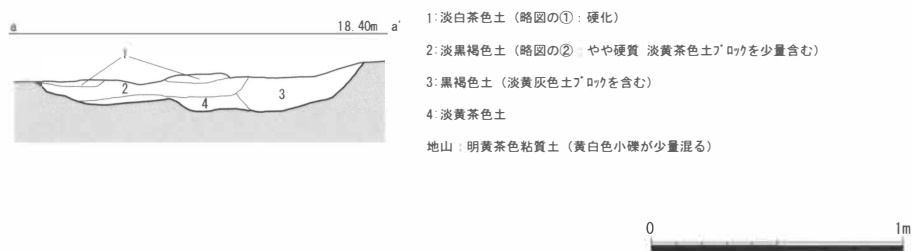
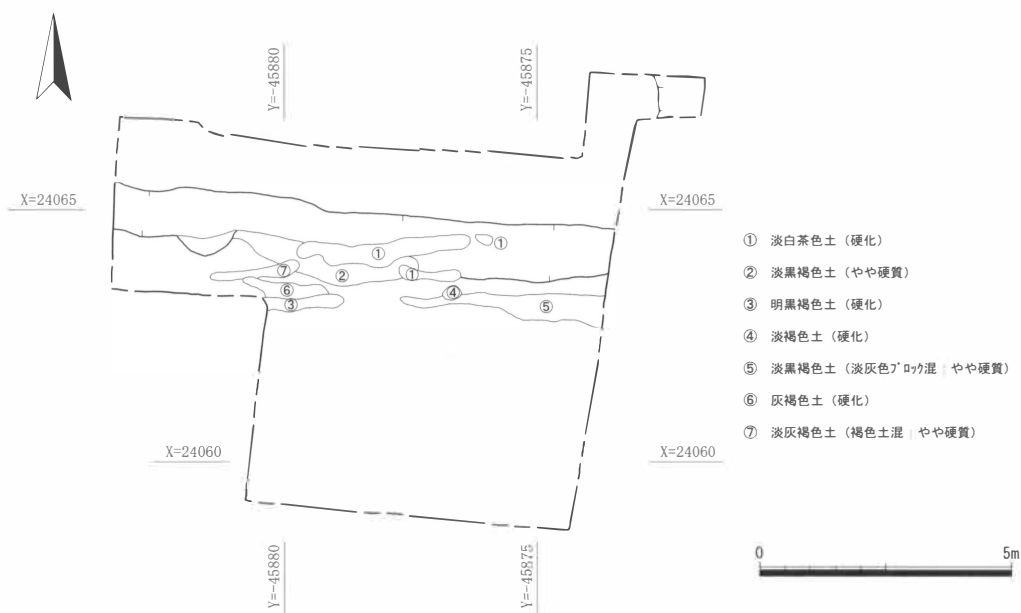
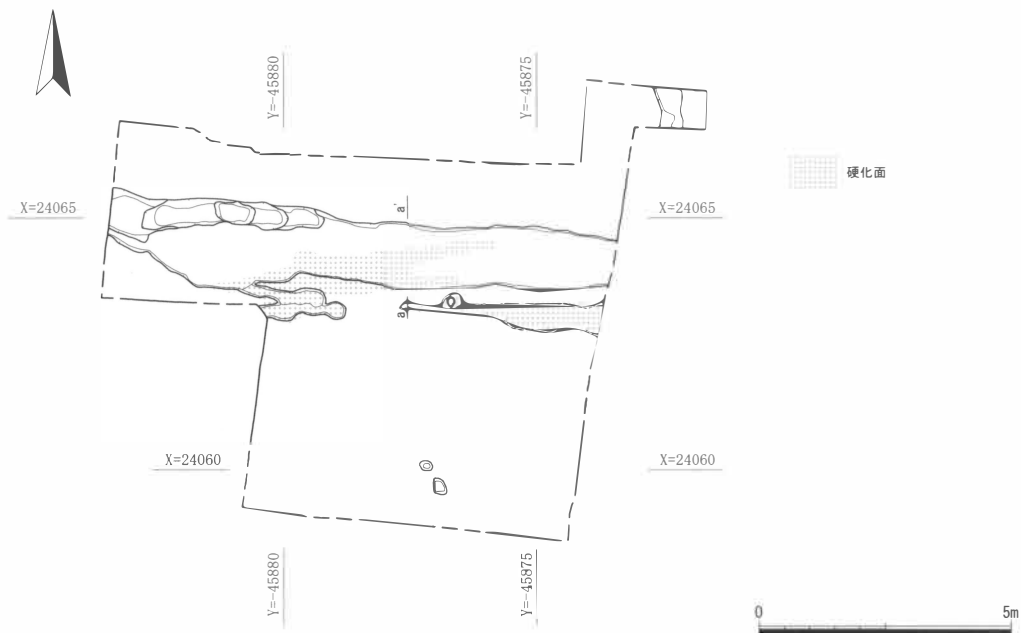


Fig.3 羽犬塚山ノ前遺跡第3次調査 遺構全体実測図・遺構略測図 (1/150)・3SD01 土層観察図 (1/30)

2. 徳久北原遺跡（第1次調査）

(1) はじめに

徳久北原遺跡は、筑後市の中央部、標高 19.5m 程の中位段丘上に立地し、筑後市大字徳久字北原 62-1 に所在する。調査区は、この段丘上の最東端に位置し、東側に展開する低地とは約 5m の高低差を生じた丘の上に存在する。今回の発掘調査は、個人住宅の新築に伴うもので、調査費用は国・県・市の補助金を充当した。発掘調査に至るまでの経過は、平成 21 年 9 月 2 日、建築主である森栄一郎氏から筑後市教育委員会に対して埋蔵文化財の有無についての照会があり、当地が周知の埋蔵文化財包蔵地であったため確認調査（吉村由美子が担当）を実施した。確認調査の結果、15～30 cm の耕作土下位に 30～60 cm の暗褐色土堆積層を認め、遺構はこの直下で確認した。遺構面は 1 層で、西から東にかけて傾斜が強く、古代～中世の遺構と遺物を認めた。この結果を基に原因者と遺跡の取り扱いについて協議をしたところ、建物部分の遺跡保存が不可能であったため記録保存として発掘調査を実施することで合意した。発掘調査は小林勇作が担当し、平成 21 年 10 月 13 日から同年 11 月 6 日までの期間実施した。なお、整理作業及び報告書作成は平成 22 年度に行った。



Fig.4 徳久北原遺跡（第1次調査）調査地点位置図（1/2,500）

(2) 検出遺構

竪穴住居

1SI10 (Fig.5)

調査区西端で確認した。住居の東隅の一部を検出し、北東部は 1SX13、1SX33 の攪乱を受けており平面プランは不明である。残存状況は 15 cm 前後であり、床面と捉えられる土層は確認できていない。住居の埋土は淡黒褐色土を基調とするが、南東部では赤茶色焼土、淡黄色焼土、炭化物を含む埋土が検出された。この埋土を除去したところ複数の浅い窪みが認められ、竈使用に伴う廃棄物痕である可能性が考えられる。

1SI15 (Fig.5, Pla.4・5)

調査区北東隅で住居の一部を検出した。遺構は 1SP11・1SK12 に切られているが、遺構検出面から

掘形までは 60 cm前後と比較的残存状態は良好であった。住居の埋土は黒褐色粘質土を基調とし、竈付近には壁体を破壊した時のものと想定される淡茶色粘質土（焼土・炭化物・小石・砂粒混じり）が厚く堆積していた。遺構は住居に付設された竈部分も検出され、竈は住居の西壁を「コ字形」状に 70 cm程度掘り込んで壁体の掘形としている。壁体掘形に対し、黄茶褐色粘質土を貼付け、住居壁手前から内側方向に両袖を構築している。竈の遺存状態は悪く、両袖部の一部を僅かに留める程度であったが、左壁内面と右壁内面の一部で赤茶色焼土が認められた。焚口幅 32 cm、奥行 57 cmを測り、支脚は認められていない。

1SI29・45 (Fig.5)

調査区東端に位置した方形状の住居と思われ、1SI50 に切られ、1SI40 を切る。トレンチ溝（確認調査）で一部を消失するが残存状態は良好であった。長軸 3.07m、検出幅 1.7m、検出面からの深さ 0.43mを測る。床面と捉えられる層及び柱穴は確認できておらず、掘形は礫層にまで達する。遺物は須恵器（蓋・坏・甕）、土師器（皿・坏・甕・竈片）が出土している。

1SI35 (Fig.5)

調査区東端で検出した方形状の住居であり、1SD01 に切られる。検出長 1.97m、検出幅 1.70m、検出面からの深さ 0.07mを測り、掘形は比較的安定したフラットな状態であった。床面及び柱穴は確認できておらず、埋土は淡黒茶色土を基調とし、遺物は土師器（坏・甕）が出土した。

1SI40 (Fig.5)

調査区南東寄りで検出した住居で、1SI29（1SI45）、1SI50 に切られる。検出長 0.96m、検出幅 1.62m、検出面からの深さ 0.30mを測る。茶褐色土を基調とする埋土で床面、柱穴は検出していない。出土遺物は土師器（皿・坏・甕）。

1SI50 (Fig.5、Pla.6～8)

調査区南東隅に位置する。遺構は 1SI29（1SI45）、1SI40 を切り、埋土は暗黒茶色土を基調とする。住居の西壁には竈が付設され、西壁を半円状に約 25 cm程度掘り込んで壁体の掘形としている。竈の遺存状態は比較的良く壁体掘形に粘土を厚く貼付け、住居西壁手前からやや内側方向に両袖を構築している。内面の一部に赤茶色焼土が認められたが、火床は焼けていなかった。焚口幅 32 cm、奥行 40 cmを測り、支脚は認められていない。両袖を断ち割ったところ左袖部内部から新たな焼成面が確認され、これらは補修した痕跡と考えられる。竈内からは土師器（甕）、竈周辺からは土師器（皿・甕・甑）が出土している。

1SI55 (Fig.5)

調査区中央で確認した長形状の住居で、1SI45、1SD01 に切られ、1SI60 を切るように検出した。トレンチ溝（確認調査）で南部を消失しており規模は不明であるが、住居幅約 3.85m、深さ 0.35mを測る。埋土は淡黒茶色土を基調とし、住居北側中位層付近から乳白色粘土（炭化物混じり）が数十cm範囲で確認されたが竈は検出されていない。住居掘形は比較的安定していたが床面、柱穴は確認されていない。須恵器（皿・坏・甕）、土師器（蓋・皿・坏・高坏・甑・塩壺・甕）が出土している。

1SI60 (Fig.5)

調査区中央で検出した。方形状の住居になると思われ 1SI55、1SD01 に切られる。黒茶色土を基調とする埋土で土師器（片）、ボタン状石製品 1 点が僅かに出土した。検出長 1.24m、検出幅 0.90m、深さ 0.40mを測り、床面は確認されていない。

溝

1SD01 (Fig.5、Pla.9)

調査区中央を走る幅広の南北溝で調査区中央あたりで途切れる。溝は調査区外北側へと更に延びており、当丘陵袖部に沿って延びていくものと想定される。検出長約 10m、幅 3.75m、深さ 0.60～0.82mを測り、溝底は緩やかな U 字状ないしは逆台形状を呈する。溝内沿岸は 2 段掘り構造を呈し、少なくとも 2 段階の掘り直しがあったものと考えられる。埋土は比較的安定した自然堆積であることから流水は伴っていなかったと思われる。2 段掘りを境とし、上層では弥生土器（片）、須恵器（蓋・坏・甕）、

土師器（皿・甑・甕）、瓦器（小皿・埴）が出土し、下層では弥生土器（片）、須恵器（蓋・坏・甕）、土師器（皿・甑・甕・土鍋・土鍾）、瓦器（埴）、白磁（碗）が認められた。

土坑

1SK05 (Fig.5)

調査区西側で検出した楕円形状の土坑で長軸 0.97m、短軸 0.69m、深さ 0.33m を測る。須恵器（甕）、土師器（坏・高坏・甑）が出土した。

1SK12 (Fig.5)

調査区北東隅で検出した半円状の土坑で 1SI15 を切る。淡黒茶色土を基調とする埋土で須恵器（甕）、土師器（坏・甕）、瓦器（埴）が出土している。幅 1.82m、深さ 0.30m を測る。

不明遺構

1SX20 (Fig.5)

当住居は調査区中央西端に位置する。1SI55、1SP31 を切り、トレンチ溝(確認調査)で一部を消失する。残存状態は悪く、深さは 10 cm 程度であった。埋土は暗黒茶色土を呈し、僅かに土師器(甕)を認めている。

1SX28 (Fig.5)

調査区南東隅で確認した遺構で 1SI40 と 1SI50 上にある。残存状態は極めて悪く、最大で深さ 14 cm を測る。底面南部は 1SI55 に付設する竈直上にあたり、焼土混じりの茶色土層であった。遺構は凹部地形に埋土が流入し堆積した痕跡とも考えられる。遺物は須恵器（甕）、土師器（坏）、瓦器（埴）が出土している。

(3) 出土遺物

竪穴住居

1SI10 カマド周辺 (Fig.6、Pla.10)

土師器

皿（1） 底部から口縁部にかけてはやや開き気味に立ち上がり、器高は 1.45 cm を測る。磨耗が著しく調整は不明である。

甕（2） 口径 19.5 cm を復元する。若干強く屈曲した口縁部を呈し、器厚は体部に比して肥厚する。体部外面は縦方向の強い刷毛目を施し、煤が付着する。体部内面から屈曲部にかけては斜方向にケズリを施す。

1SI15 (Fig.6、Pla.10)

土師器

坏（3・4） 3 は丸味を帯びた底部を呈し、外面は手持ちによるヘラケズリを施す。内面はナデ、ヨコナデ調整を施し、色調は淡橙茶色である。4 は口径 12.9 cm、底径 10.3 cm、器高 3.45 cm を復元する。底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面は不定方向のナデ、体部外面はケズリ後ヨコナデ、体部内面及び口縁部内外面はヨコナデである。

甕（5） 口径 9.1 cm を復元する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は横方向のナデ後工具ナデ、体部外面は磨耗のため調整不明である。

1SI29・45 (Fig.6、Pla.10・11)

土師器

皿（6・7） 6 は口径 20.3 cm、器高 3.45 cm を復元する。底部から口縁部にかけて緩やかに立上がりながら口縁端部は外反する。底部外面は手持ちヘラケズリ、底部内面は不定方向のナデ、口縁部内外面はヨコナデである。7 は丹塗りを施した底部細片である。底部外面は手持ちヘラケズリ後ミガキ、底部内面はヨコナデ調整が認められる。

坏（8～13） 8 は口縁部細片で極僅かに S 字状の断面形を呈する。内外面の調整はヨコナデである。9 は口縁部の破片で口縁端部は僅かに外反する。口径 12.7 cm を復元し、体部外面に手持ちヘラケズリ調整が認められる。10 は 9 と同じく口縁部の破片で口縁端部は僅かに外反する。口径 13.0 cm を復元。内外面の調整は磨耗のため不明である。11 は断面形が S 字状を呈する坏で口縁部内外面はヨコナデ、

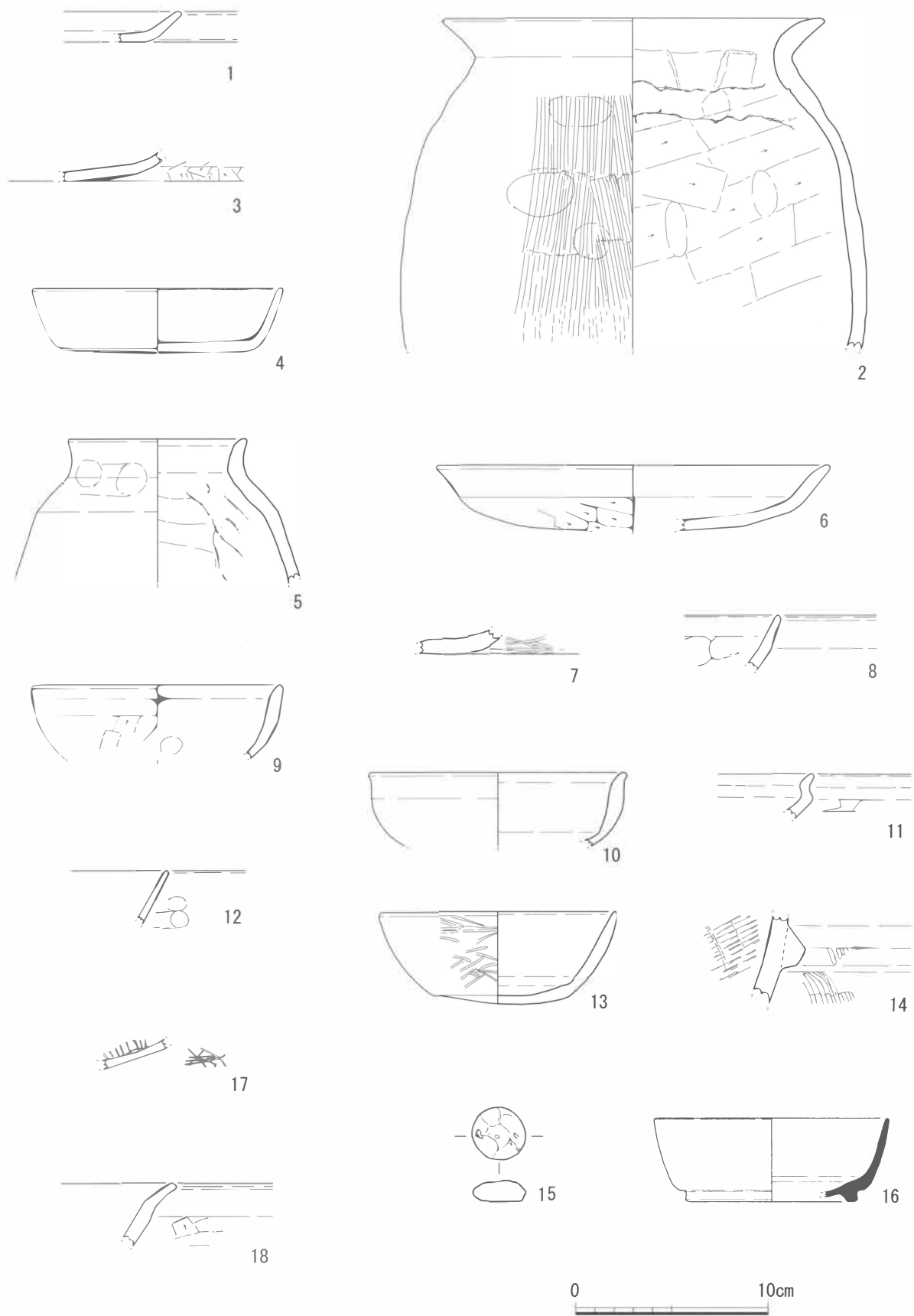


Fig.6 竪穴住居 (1SI10・15・29-45・35) 出土遺物実測図 (1/3)

体部外面には手持ちヘラケズリ調整を施す。12は口縁部細片で内外面はヨコナデ、体部外面は指頭圧痕が認められる。13は底部外面に丹塗りを認める。口径12.0cm、底径7.05cm、器高4.7cmを復元し、底部以外の外面にミガキを施す。口縁部及び体部の内面はヨコナデ、底部内面は不定方向のナデである。

竈（14） 外面に断面代形状の貼付突帯を施した細片である。内外面に粗い刷毛目調整が認められる。

土製品

面子（15） 円盤状の面子で最大径 2.75 cm、重さ 8.8g を計測する。色調は淡橙茶色である。

須恵器

坏（16） 口径 11.9 cm、高台径 9.0 cm、器高 4.35 cmを復元する。底部外面は回転ヘラケズリ後、断面台形状の高台を貼り付け、底部外面以外はヨコナデ調整を施す。

1SI35 (Fig.6、Pla.11)

土師器

坏（17） 底部細片で外面に丹塗りを施す。外面はミガキ、内面は暗文を認める。

甕（18） 甕若しくは甑の口縁部細片で口縁部は端部にかけてつまみ上げたように外反する。

1SI40 (Fig.7、Pla.11)

土師器

坏（19） 口縁部細片で内外面は磨耗のため調整不明である。

甕（20・21） 20 は口径 16.2 cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はケズリ調整である。

21 は口径 27.9 cmを復元する。内外面はヨコナデを基調とし、指頭圧痕が多く認められる。体部外面下位には煤が付着する。

1SI50 カマド (Fig.7、Pla.11)

土師器

甕（22～25） 22 はほぼ完形の甕で口径 12.3 cm、胴部最大径 13.7 cm、器高 12.65 cmを測る。口縁部はヨコナデ、体部及び底部外面は粗い刷毛目、内面はナデ調整を施し、体部上位に煤が付着している。

23 は底部破片で外面は刷毛目、内面はナデによる指頭圧痕を認める。24 はほぼ完形の甕で口径 19.2 cm、

胴部最大径 18.0 cm、器高 21.75 cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部及び底部外面は粗い刷毛目、体部及び底部内面はナデ、体部と口縁部境の内面は横方向の刷毛目を認める。また底部外面付近に煤が付着する。

25 は口径 23.3 cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ後縦方向の刷毛目、口縁部に近い体部内面は横方向の刷毛目、体部内面下位は縦方向のケズリを認める。

甑（26・27） 26 は口縁部破片である。外面はナデ後縦方向の刷毛目、内面はナデによる指頭圧痕が残る。27 は口径 22.5 cm、底径 14.3 cm、器高 22.6 cmを復元する。薄手の把手を体部 2ヶ所に貼り付け、

口縁部外面及び底部の内外面はヨコナデ、口縁部内面は横方向の粗い刷毛目、体部外面は縦方向の刷毛目、体部内面はナデの調整を認める。

1SI50 カマド周辺 (Fig.8、Pla.11・12)

土師器

皿（28） 体部、口縁部はヨコナデ、底部外面は回転ヘラケズリである。

甕（29・30） 29 は口縁部細片で、体部よりも肥厚した口縁部を呈する。口径 15.9 cmを復元する。

30 は緩やかに外反した口縁部を呈し、口径 16.7 cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ後縦方向の刷毛目、体部内面は不定方向のナデ調整を施す。

甑（31・32） 31 は口縁部細片でラップ状に緩やかに外反する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向の粗い刷毛目、内面上位は横方向の刷毛目、下位はナデ調整を認める。32 は把手の細片で体部に貼り付けたナデ調整を認める。把手下位に僅かに刷毛目が残る。

1SI55 (Fig.9、Pla.12・13)

土師器

蓋（33） 口縁部細片であるが口径 19.0 cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、天井部外面は回転ヘラケズリが認められるが、内面は磨耗のため調整不明である。

皿（34） 口径 15.1 cm、底径 14.0 cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面は手持ちヘラケズリ調整である。

坏（35～37） 35 は口径 15.4 cm、底径 11.3 cm、器高 3.2 cmを復元する。磨耗が著しく調整は不明である。

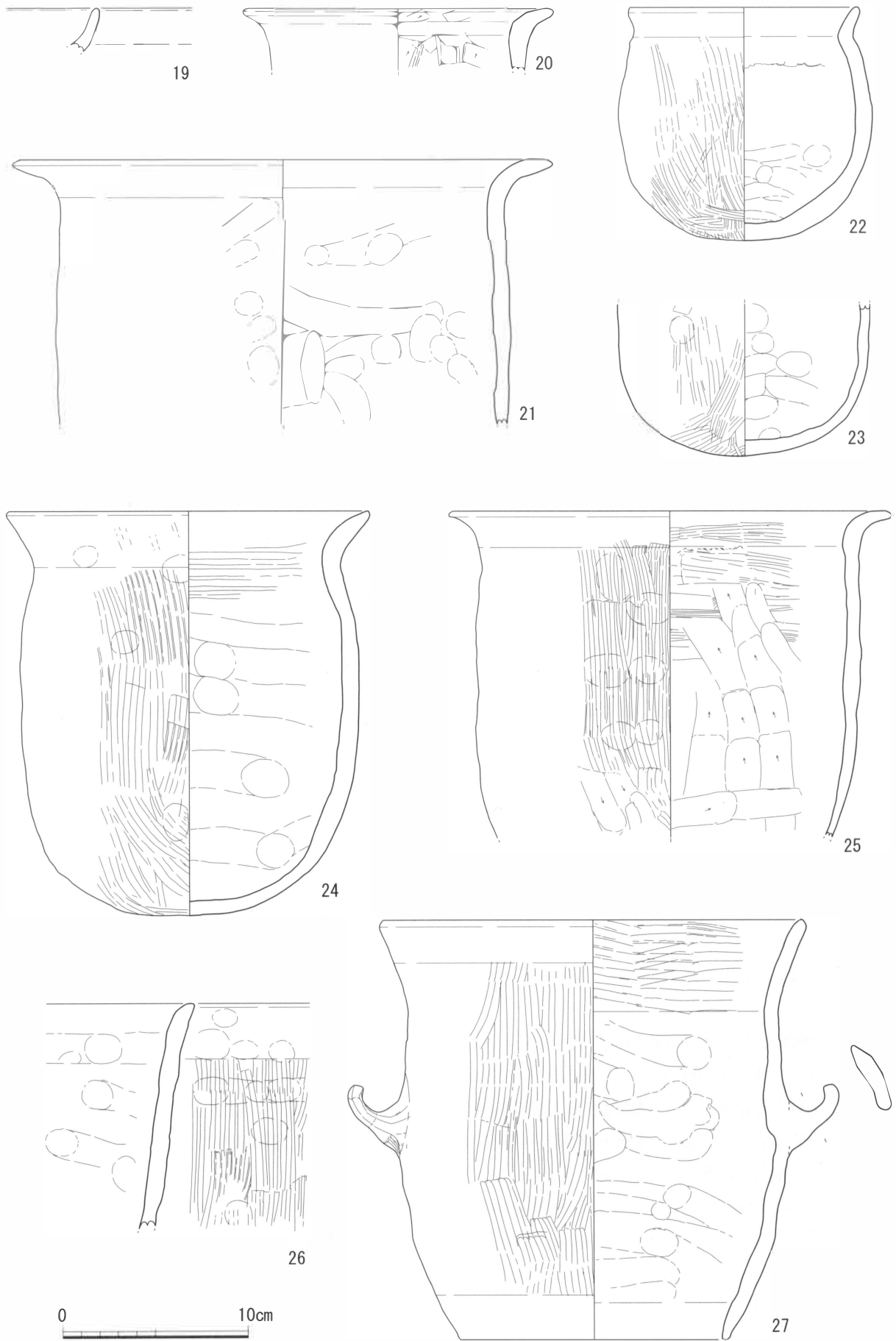


Fig.7 竖穴住居 (1SI40・50) 出土遺物実測図 (1/3)

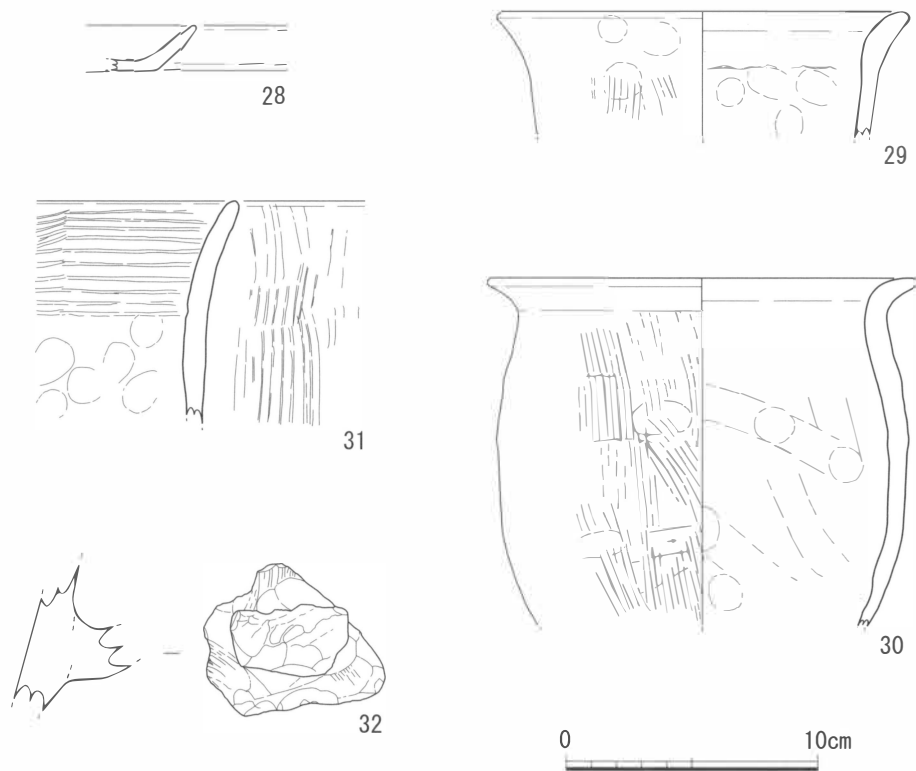


Fig.8 竪穴住居（1SI50 カマド周辺）出土遺物実測図（1/3）

36 は口縁部細片で口縁部内外面はヨコナデである。体部外面の一部にケズリ調整を認める。37 は口縁部細片で内外面はヨコナデである。色調は淡橙茶色。

甕（38～40） 38 は口縁部細片で口径 13.0 cmを復元する。口縁部はヨコナデ、外面の一部に刷毛目を認める。39 は完形の甕で口径 12.3 cm、底径 5.1 cm、器高 6.9 cmを測る。底部外面はケズリ、体部内外面及び底部内面はナデで、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。40 は口縁部細片で口径 21.7 cmを復元する。調整は磨耗のため不明であり口縁端部に煤が付着する。

甑（41） 口縁部細片で口径 25.5 cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は縦方向の細かい刷毛目、体部内面はケズリ調整である。

塩壺（42） 体部細片で内外面ともに調整の指頭圧痕を多く残す。

須恵器

皿（43） 底部細片で底径 12.4 cmを復元する。調整は磨耗のため不明。

坏（44～46） 44 は口径 13.8 cm、高台径 10.5 cm、器高 4.15 cmを復元する。底部外面は回転ヘラ切り、底部内面は不定方向のナデ、体部及び口縁部内外面はヨコナデである。45 は大型の坏と思われる細片で内外面はヨコナデである。外面下端部の一部にケズリが残る。46 は底部細片で高台径は 12.3 cmを復元する。底部外面は回転ヘラ切り後ナデか？

甕（47・48） 47 は緩やかに外反する好転部を呈し、口径は 19.1 cmを復元する。体部外面に格子目叩き、体部内面は同心円文叩きを認め、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。焼成は良好である。48 はく字状に近い口縁部を呈し、口径は 22.0 cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は格子目叩き、体部内面は同心円文叩き後ナデ消しを施す。

1SI60 (Fig.9、Pla.13)

土製品

面子（49） 円盤状の面子で最大径 4.0 cm、重さ 14.2g を計測する。色調は濃茶褐色で調整は不明である。

溝

1SD01 (Fig.10、Pla.13)

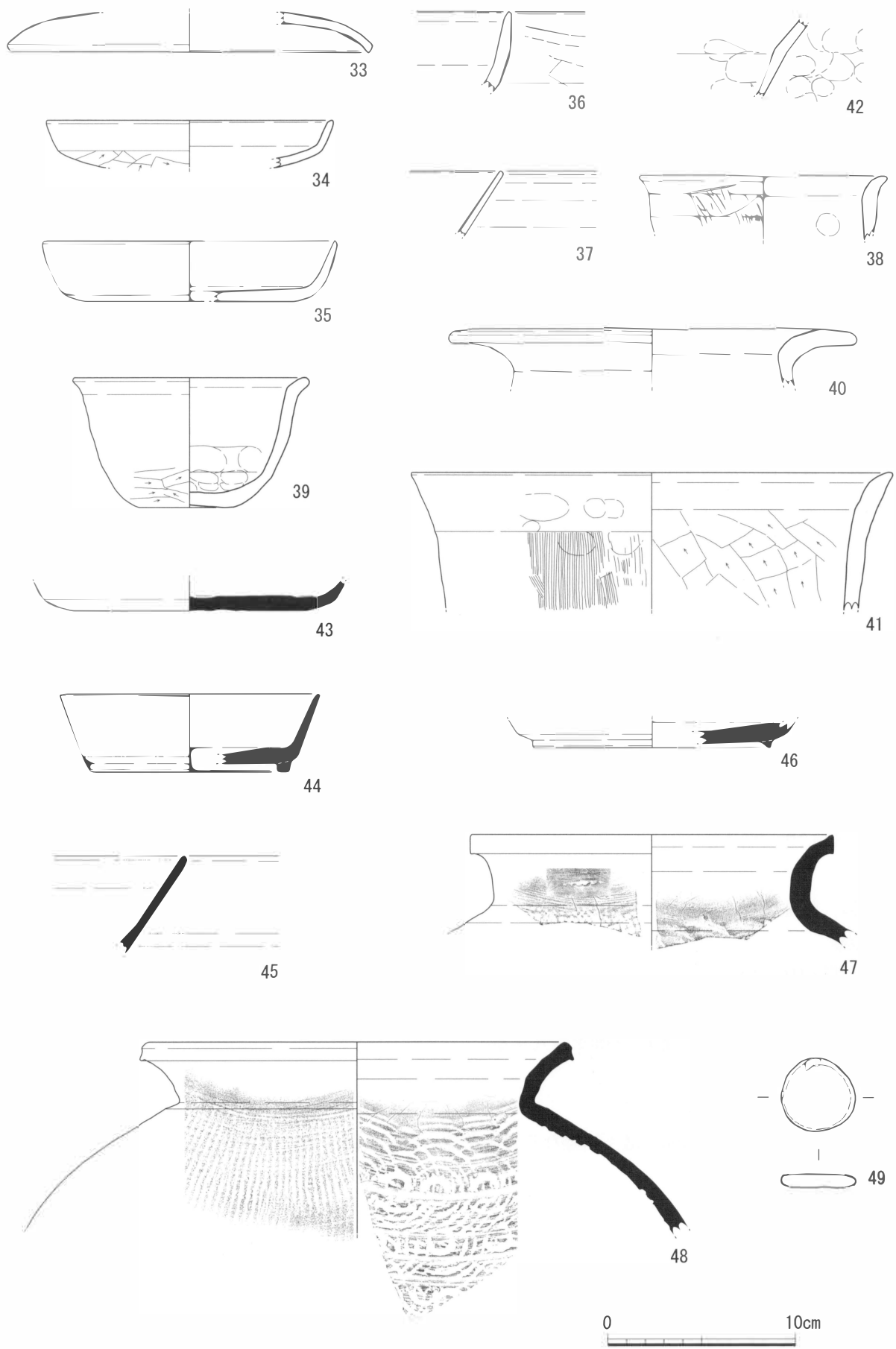


Fig.9 竖穴住居 (1S155・60) 出土遺物実測図 (1/3)

須恵器

蓋 (50～52) 50 はかえりのある口縁部細片で内外面はヨコナデある。焼成は良好。51・52 は口辺部を短く断面を三角形状に屈折した蓋で 52 は口径 14.2 cm、器高 2.9 cm を復元する。口縁部内外面はヨコナデ調整を認めるが、天井部内外面は磨耗のため調整不明である。

坏 (53) 底部細片で高台径は 8.0 cm を復元する。調整は磨耗のため不明で焼成はやや不良である。

瓦器

皿 (54) 細片で口縁部内外面はヨコナデ、底部内面は不定方向のナデ、底部外面は糸切りである。淡茶灰色の色調で胎土に微砂粒を含む。

碗 (55・56) 55 は口縁部細片で口縁部内外面はヨコナデである。56 は底部細片で断面三角形状の高台を貼り付ける。高台径は 7.1 cm を復元し、色調は淡灰色、胎土は微砂粒を含む。

1SD01 下層 (Fig.10、Pla.13・14)

土師器

坏 (57) 口径 13.9 cm、底径 9.7 cm、器高 2.95 cm を測り、底部外面は糸切りである。口縁部及び体部内外面はヨコナデ、底部内面は不定方向のナデ調整である。

須恵器

蓋 (58) 輪状高台を有する蓋細片でつまみ径は 6.0 cm を復元する。天井部外面は回転ヘラケズリ天井部内面は不定方向のナデである。

坏 (59) 歪みのある細片で断面が台形状の高台を貼り付ける。体部及び口縁部の内外面はヨコナデ、底部内面はナデである。

瓦器

碗 (60) 底部細片で高台径は 5.9 cm を復元する。磨耗のため調整は不明である。

土製品

土錘 (61) 長さ 3.4 cm、幅 1.0 cm、重さ 1.7g を計測する。中心の穿孔径は 3 mm で色調は明橙茶色である。

白磁

碗 (62) V類。乳白色の素地に透明感のある釉薬を薄く施釉する。

土坑

1SK12 (Fig.10、Pla.14)

瓦器

碗 (63) 底部細片で高台径は 8.2 cm を測り、不明瞭なミガキを内面に施す。

不明遺構

1SX20 (Fig.10、Pla.14)

土師器

甕 (64) 口縁部細片で口径 18.9 cm を復元する。

1SX28 (Fig.10、Pla.14)

黒色土器

碗 (65) 口縁部細片で内面には不明瞭なミガキを認める。外面は強いヨコナデである。

ピット

1SP03 (Fig.10、Pla.14)

土師器

坏 (66) 口径 11.5 cm を復元する。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面は手持ちヘラケズリ、底部内面はナデの調整を認める。

1SP05 (Fig.10、Pla.14)

土師器

坏 (67) 口縁部の細片。色調は淡橙茶色、胎土は微砂粒を含む。

甗 (68) 把手の細片で強いナデ調整を残す。

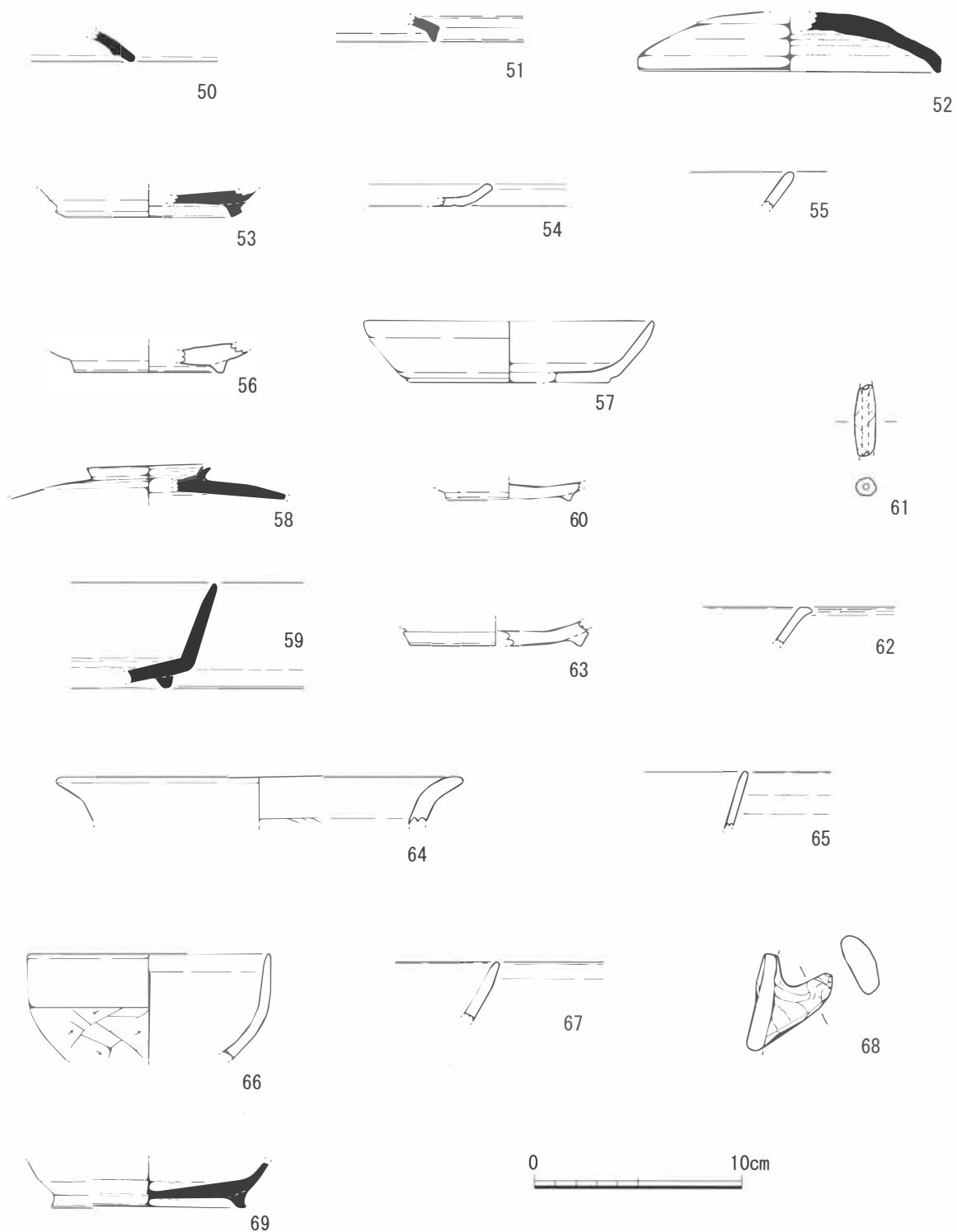


Fig.10

溝 (1SD01)、土坑 (1SK12)、不明遺構 (1SX20・28)、ピット (1SP03・05・09)
 出土遺物実測図 (1/3)

1SP09 (Fig.10、Pla.14)

須恵器

坏 (69) 底部細片で高台径は9.3 cmを復元する。やや開いた高台を呈し、底部外面は回転ヘラ切り、底部内面は不定方向のナデ、体部内外面はヨコナデである。

(4) 小結

当地から数百メートル離れた北側の丘陵部では律令期の集落遺跡群である羽犬塚中道遺跡、羽犬塚射場ノ本遺跡、羽犬塚山ノ前遺跡等が点在することが既に知られており、当遺跡はこれら遺跡群と同丘陵の南東端部に位置する。今回は、狭小の調査区域であったにも関わらず 10 軒以上にも及ぶ律令期の竪穴住居と中世の区画溝が確認でき、多くの遺物を得たことは成果であった。同時に、この成果は当該期の集落遺跡の範囲を更に広げたこととなり、当該期における遺跡範囲の特定に有意義なものとなった。当地方の律令期における住居は方位によってある程度の時期差があることが判明しつつある中、当調査区で確認された竪穴住居は概ね正方位から若干東に傾く方位を示すようであるが、住居壁のラインが不明瞭かつ全体プランの確認ができていないので正確な方位を特定することは困難であった。当住居群は複数の切り合いによって住居の先後関係は明らかであるが 8c 前半～中頃が主体であり、短期間に建て替えが行われた可能性が考えられる。

断面 U 字形ないしは逆台形状を呈する中世の溝 (1SD01) は調査区中央部で途切れるように検出した。当溝を検出した場所は丘陵部東端の境に面していたことや溝の形状及び堆積土の状況を勘案すると流水を伴わない区画溝であった可能性が考えられる。出土遺物は律令期と中世の遺物が混在しているが画期となる時期は 13c 代と捉えられる。

S番号	遺構番号	内容(切合い:新→古)	備考
1	1SD 01	溝:南北溝(01→35・45・55・60)	
2	1SP 02	ピット:埋土に焼土混入	
3	1SP 03	ピット	
4	1SP 04	ピット	
5	1SK 05	土坑(05→23)	
6	1SP 06	ピット(6→18)	
7	1SX 07	カクラン	
8	1SX 08	カクラン	
9	1SP 09	ピット	
10	1SI 10	竪穴住居:方形(13→33→10)	
11	1SP 11	ピット(11→15)	
12	1SK 12	土坑(12→15)	
13	1SX 13	カクラン	
14	1SP 14	ピット(14→19)	
15	1SI 15	竪穴住居:方形?(11・12→15)	
16	1SK 16	土坑	
17	1SK 17	土坑(26→17)	
18	1SK 18	土坑(6→18→25)	
19	1SP 19	ピット(14→19→26・27)	
20	1SX 20	(20→31)	
21	1SP 21	ピット	
22	1SP 22	ピット	
23	1SP 23	ピット(5→23)	
24	1SP 24	ピット	
25	1SK 25	土坑(18→25)	
26	1SK 26	土坑(19→26→17)	
27	1SK 27	土坑(13・14→27)	
28	1SX 28	(40→28→50)	
29	1SI 29	竪穴住居:方形?(29→40→50)	1SI45の一部か?
30	欠番		
31	1SP 31	ピット(20→31)	
32	1SP 32	ピット	
33	1SP 33	ピット(13→33→10)	
34	1SP 34	ピット	
35	1SI 35	竪穴住居:方形?(01→35)	
40	1SI 40	竪穴住居:方形?(29→40→28・50)	
45	1SI 45	竪穴住居:方形?(01→45→55)	1SI29と同一か?
50	1SI 50	竪穴住居:方形?(29→40→28→50)	
55	1SI 55	竪穴住居:方形?(01→55→60)	
60	1SI 60	竪穴住居:方形?(01→55→60)	

Tab.1 徳久北原遺跡(第1次調査)遺構番号台帳

3. 山ノ井南野遺跡（第7次調査）

(1) はじめに

山ノ井南野遺跡（第7次調査）は筑後市大字山ノ井字南野 664-17 に所在する。平成20年4月3日に当該地を含めた宅地造成に伴う試掘調査依頼が市教委に提出され、試掘調査を行ったところ、遺構が確認され文化財保護法第93条による届出がなされた。県教委からの指示は慎重工事であったため、遺構保存措置で宅地造成された。宅地造成後、個人専用住宅箇所について個別に建造物の審査を行い、平成21年9月29日に当該地の物件に関して文化財保護法第93条による届出が原因者より提出され、建造物が遺構を破壊すると判断した県教委から発掘調査の指示を受けた。本調査は個人専用住宅部分の約70㎡について行うこととし、調査費用は国庫補助金、県費補助金、市文化財保護部局で負担した。調査は上村英士が担当し、平成21年11月3日から同年11月5日まで実施した。

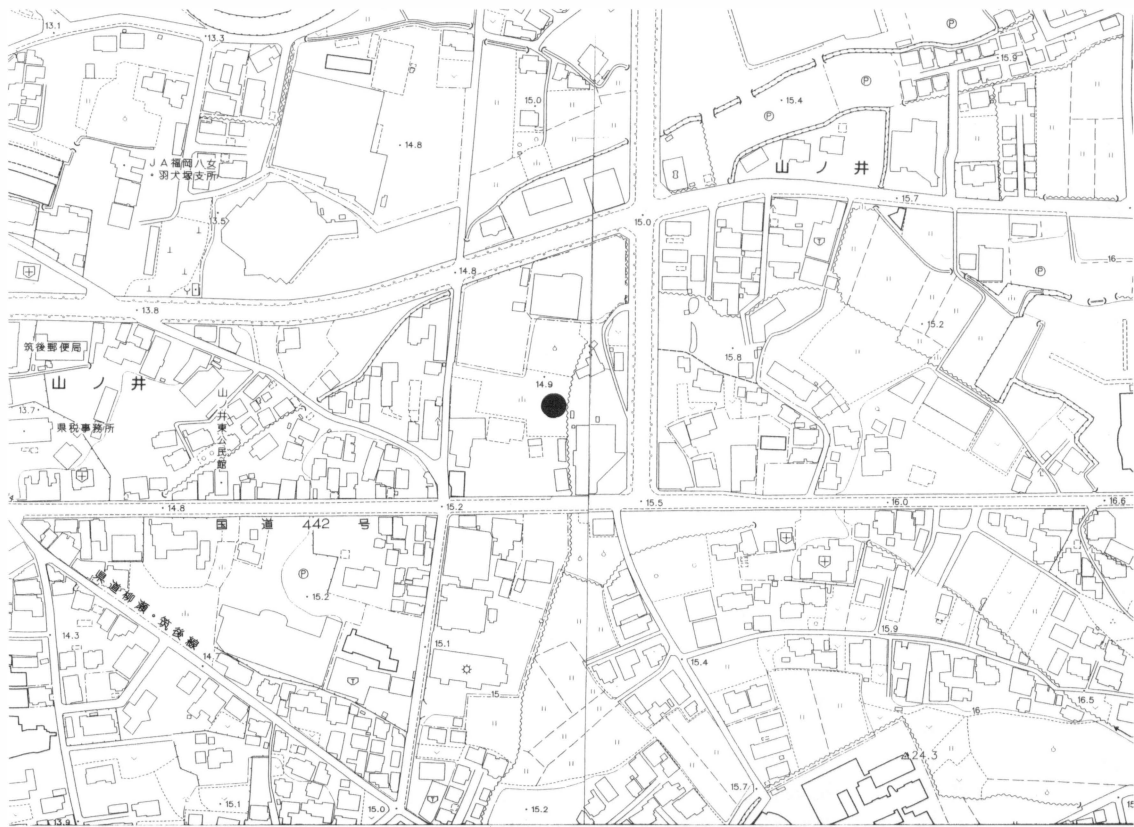


Fig.11 山ノ井南野遺跡（第7次調査）調査地点位置図（1/2,500）

(2) 基本土層

調査区は旧畑地を宅地造成しており、表面に真砂土が約15cm下に造成土が約150cm、造成土を除去後、淡黒色土の包含層を約10cm～15cm確認した。包含層を除去した黄色粘質土の地山に遺構が切り込んでいる。黄色粘質土の地山下は黄白色粘土地山となる。

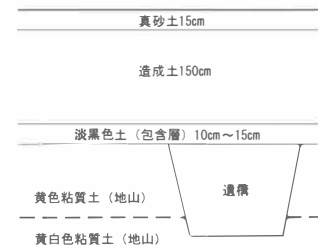


Fig.12 基本土層模式図

(3) 検出遺構

溝

7SD1 (Fig.16、Pla.15・16)

調査区中央で検出した南北溝で調査区外へ延びる。検出長約2.55m、検出幅約1.1m、深さ約0.6mを測る。土層から掘り直した痕跡があり、断面形態はU字状を呈する。溝からは土師器（小皿片、土鍋片）を出土している。

7SD2 (Fig.16)

調査区東端で検出した南北溝で溝東側立上がりは調査区外へ延びる。検出長約 3.3 m、深さ約 0.09 mを測る。埋土は単層で暗黒色粘質土である。遺物は皆無であった。



Fig.13 山ノ井南野遺跡 (第7次調査) 遺構略側図 (1/100)

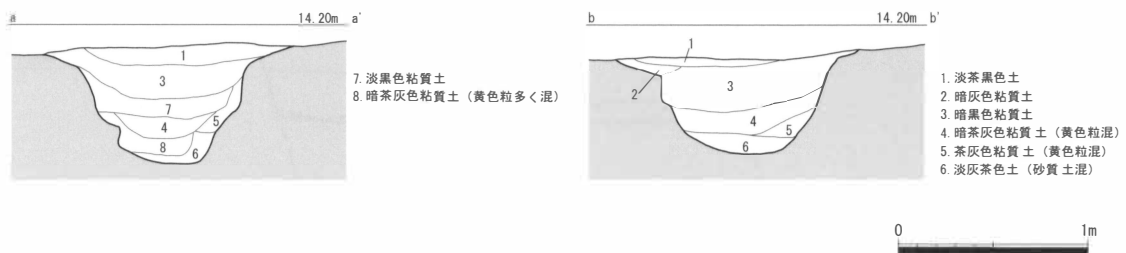


Fig.14 7SD1 土層断面図 (1/40)

(4) 出土遺物

溝

7SD1 (Fig.15、Pla.16)

土師器

土鍋 (1)

口縁部片で口唇部に縄目の文様が残る。胎土は粗く、焼成は良好である。

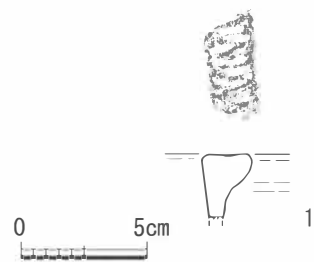


Fig.15 7SD1 出土遺物 (1/3)

(5) 小結

今次調査において検出された遺構は溝 2 条、風倒木痕であった。

溝に関して、ぼぼ真北をとる 2 条について考察する。

当市域は発掘調査で溝を検出することが多い。溝の性格として自然流路ないしは人工河川、用排水路、道路側溝、条理による区画溝など様々である。特に市の中央部から南部にかけては扇状地性低地が広がり、「水」に関する発掘調査事例や文献資料が多く残る地域である。特に矢部川や山ノ井川・花宗川の開削や取水・井堰に関しては近世以降、藩の軍事的目的による施設開発や農業推進に伴う施設の開発を度々行っている。当市域では、先人たちが自然の脅威に立ち向かい「水は高いところから低いところへ流れる」という原理に逆行し、開発を進めた山ノ井川や花宗川、久富用水路や市北部のため池群という形で現在に受け継がれている。

発掘調査によって、溝（自然流路・人工河川など）が検出されることは先に述べたが、その性格を裏

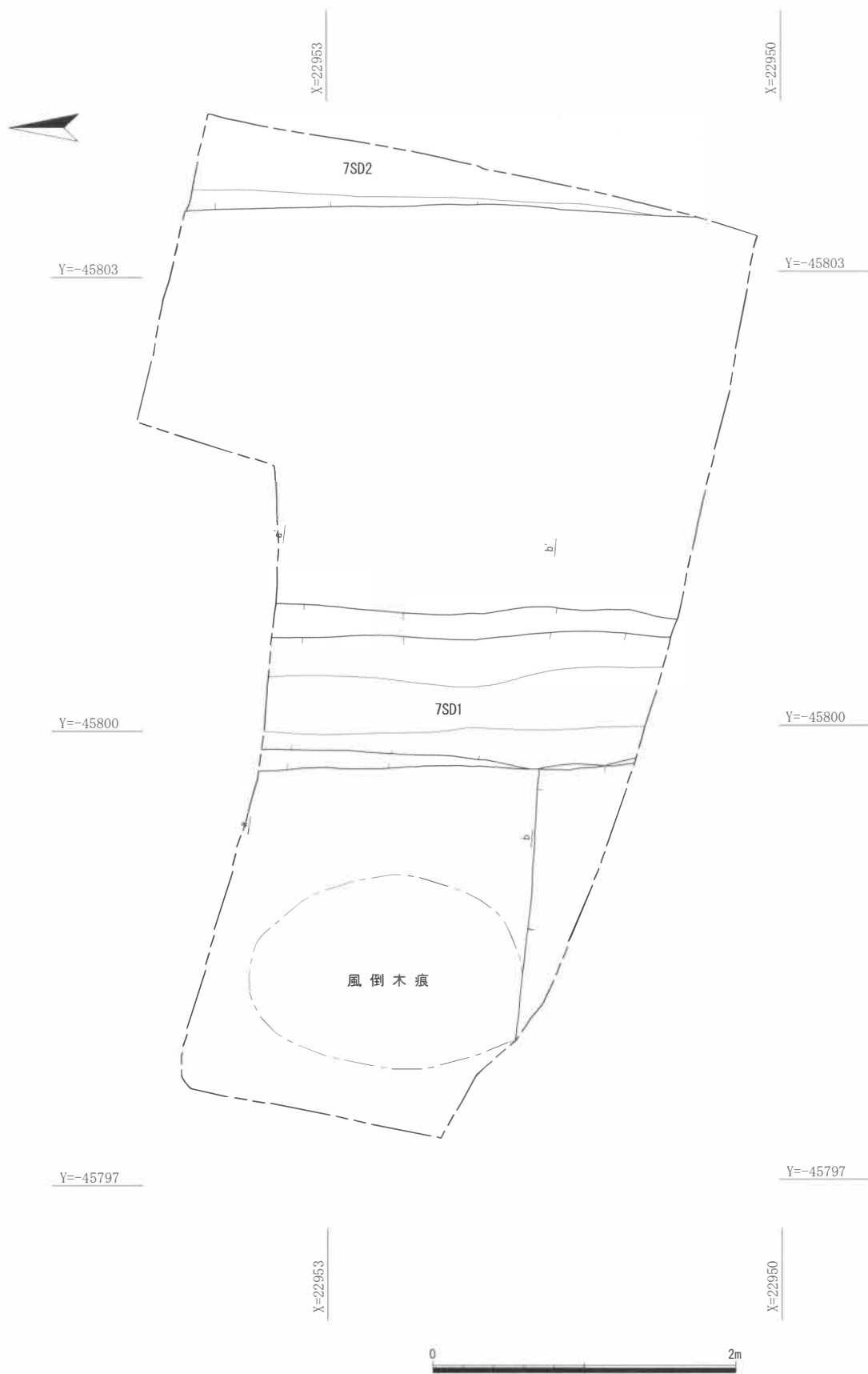


Fig.16 遺構全体図 (1/40)

づけ、考古学的な検証をなした事例は少ない。これは、発掘調査による検出事例が単発的であり、点としての事例が多いためである。明治以降の地割り及び航空写真や古代・中世の推定条理等の資料を使い、検出された遺構の検証を試みたこともあるが、遺構の性格の特定までは困難であった。例えば久恵今町遺跡では河川状の大溝を検出し、調査区中央には井堰を設けていた痕跡を確認しているが、出土遺物や

層位による埋没過程復原及び時代比定の難しさ等、様々な要因により「溝」の性格及び久恵地区での土地利用の考古学的検証を実現できていない。周辺調査事例等の増加により、今後明らかになる可能性はあるものの、本調査事例が圃場整備事業であったこと等を勘案すると、線及び面ではなく、点としての調査事例が当市域において数多く存在することを指摘しておく。

今次調査で明らかになった溝2条について考察すると、今次調査北西近隣で山ノ井南野遺跡第2次～第4次調査が行われている。山ノ井南野3・4次調査では古代官道を検出しており、東西両側溝はほぼ南北に走る。当市の古代官道側溝埋没時期は概ね9世紀代であるが、東側溝である3SD30及び4SD10は例外的に最終埋没が13世紀代である。東側溝については報告にもあるが、古代官道終焉後、中世段階での土地利用について示唆するものである。また、山ノ井南野遺跡第3・4次調査東隣の山ノ井南野遺跡第2次調査では同じく中世段階での東西及び南北の溝を検出しており、特に2SD01・10の2条の溝は4次調査の古代官道東側溝4SD10へ接続する可能性があり、中世段階での区画された土地利用がうかがえる。

近接する山ノ井南野遺跡第2次調査～第4次調査及び第7次調査の4遺跡の中世段階の溝の概要をまとめると、南北軸の溝は第3・4次調査検出古代官道東側溝(3SD30、4SD10)、第2次調査溝(2SD10)、第7次調査溝(7SD1)の3条、東西軸の溝は2次調査溝(2SD01)の1条である。これらの溝は軸が東西及び南北にはほぼ沿っており、溝間の距離については南北溝3SD30、4SD10と南北溝2SD10間が芯々で約29m、南北溝2SD10と南北溝7SD1間が約46mである。但し、これらの溝が中世期(13世紀代)に同時性があり、土地利用として区画していたかについては確証が得られていない事も付記しておく。

今次調査の検出溝については、断面がU字状を呈し、掘削痕は認められないものの人工的に造作された溝である。埋没時期は13世紀以降と考えられ、当市の中世期を考える上で、また前記した土地利用を考える上で貴重な資料となった。今後は、周辺遺跡の資料の増加と歴史地理学などの成果から総合的に、地域における「溝」の役割について考察しなければならない。

参考文献

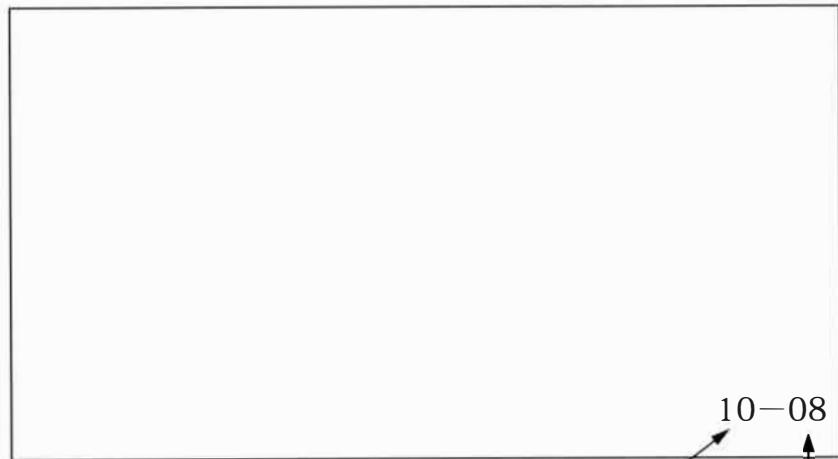
『筑後市史』第1巻 1997 筑後市

『山ノ井南野遺跡Ⅱ』筑後市文化財調査報告書第59集 2005 筑後市教育委員会

『山ノ井南野遺跡Ⅲ』筑後市文化財調査報告書第64集 2005 筑後市教育委員会

写真図版

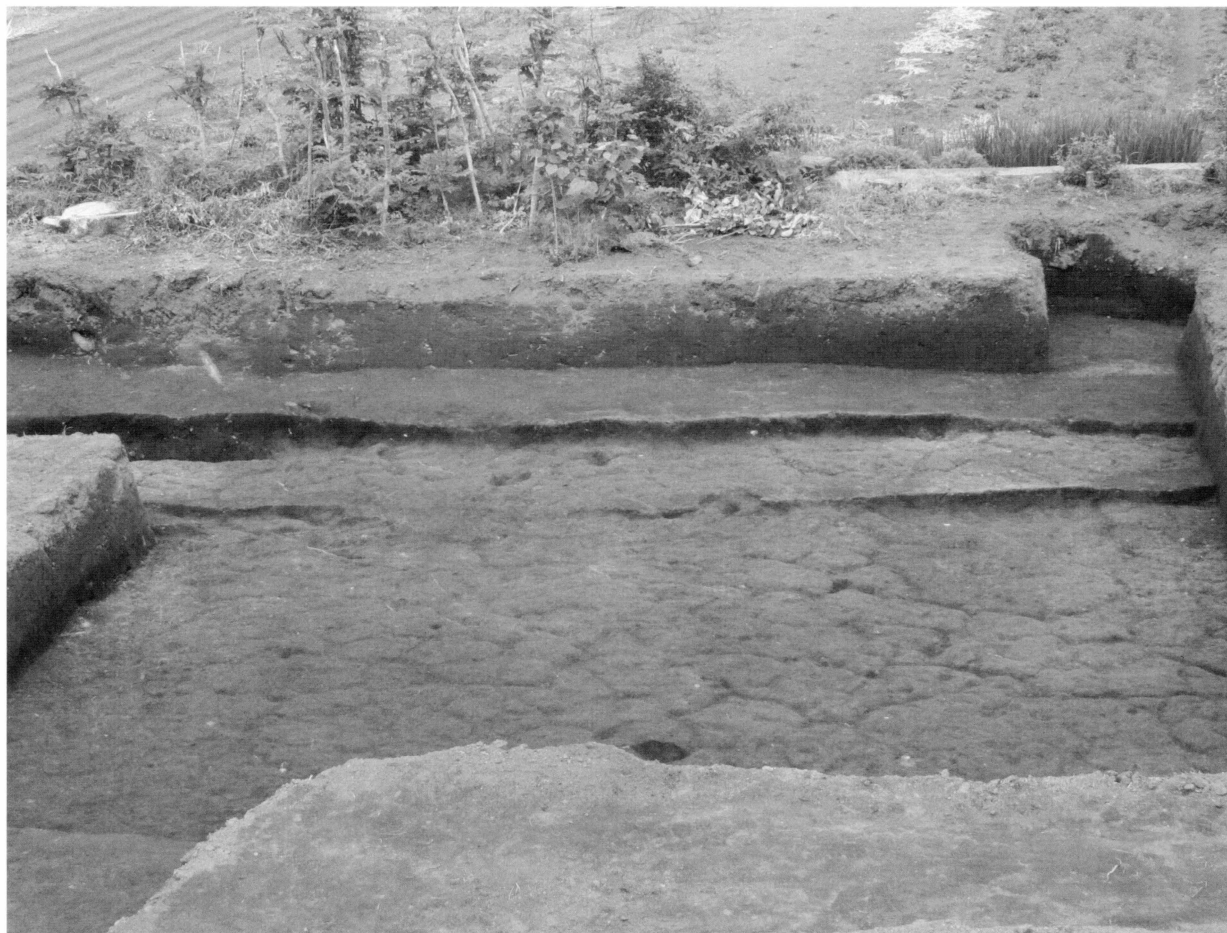
遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。



10-08

Fig. 番号

遺物番号



羽犬塚山ノ前遺跡第3次調査 調査区全景（南から）



羽犬塚山ノ前遺跡第3次調査 3SD01（東から）



徳久北原遺跡調査区北東部完掘状況（東から）



徳久北原遺跡調査区東部完掘状況（南東から）



徳久北原遺跡調査区西部完掘状況（南東から）



徳久北原遺跡調査区中央部完掘状況（南西から）

Pla 4



1SI15 土層確認状況（西から）



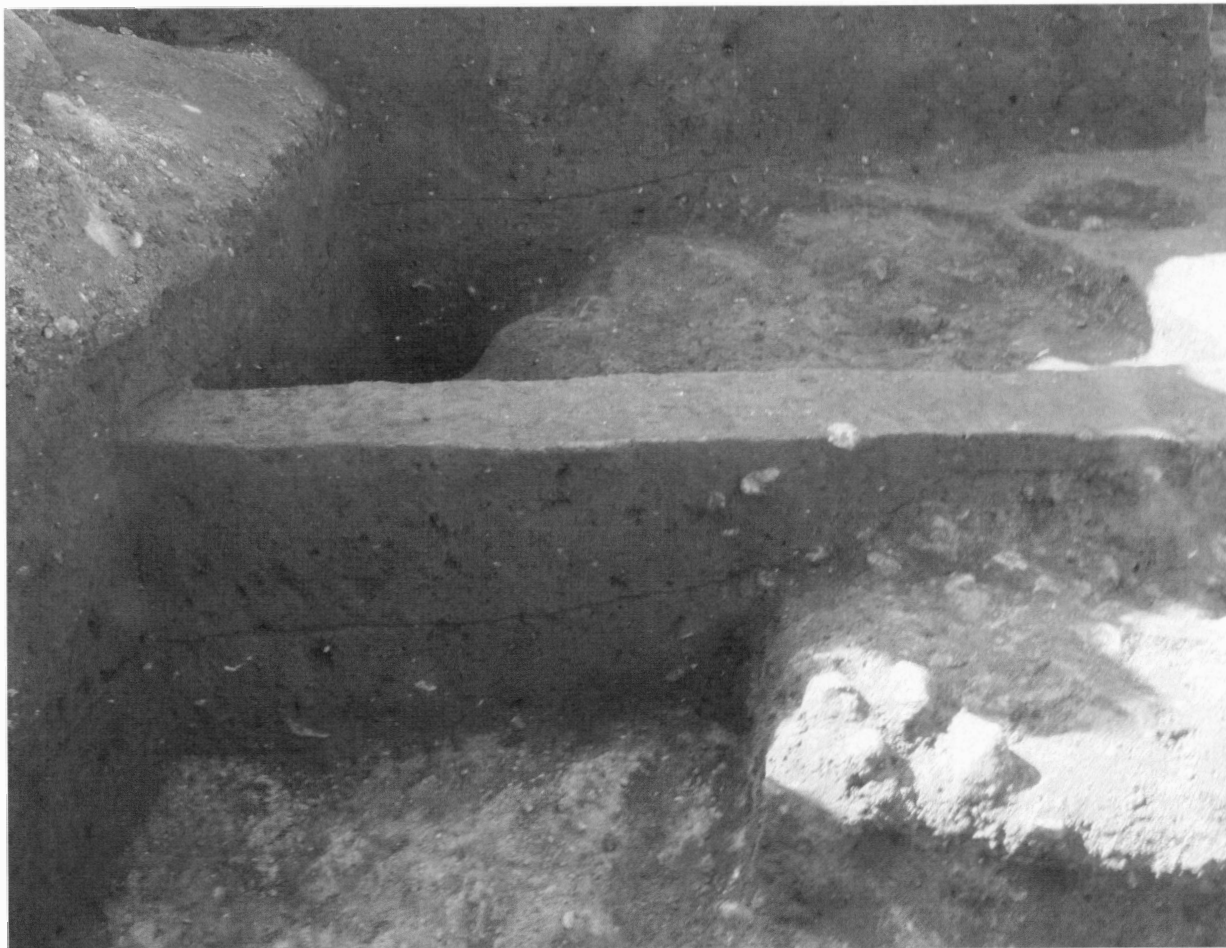
1SI15 カマド検出状況（北から）



1SI15 カマド検出状況（真上から）



1SI20 土層確認状況（東から）



1S150 土層確認状況（北から）



1S150 カマド遺物出土状況（西から）



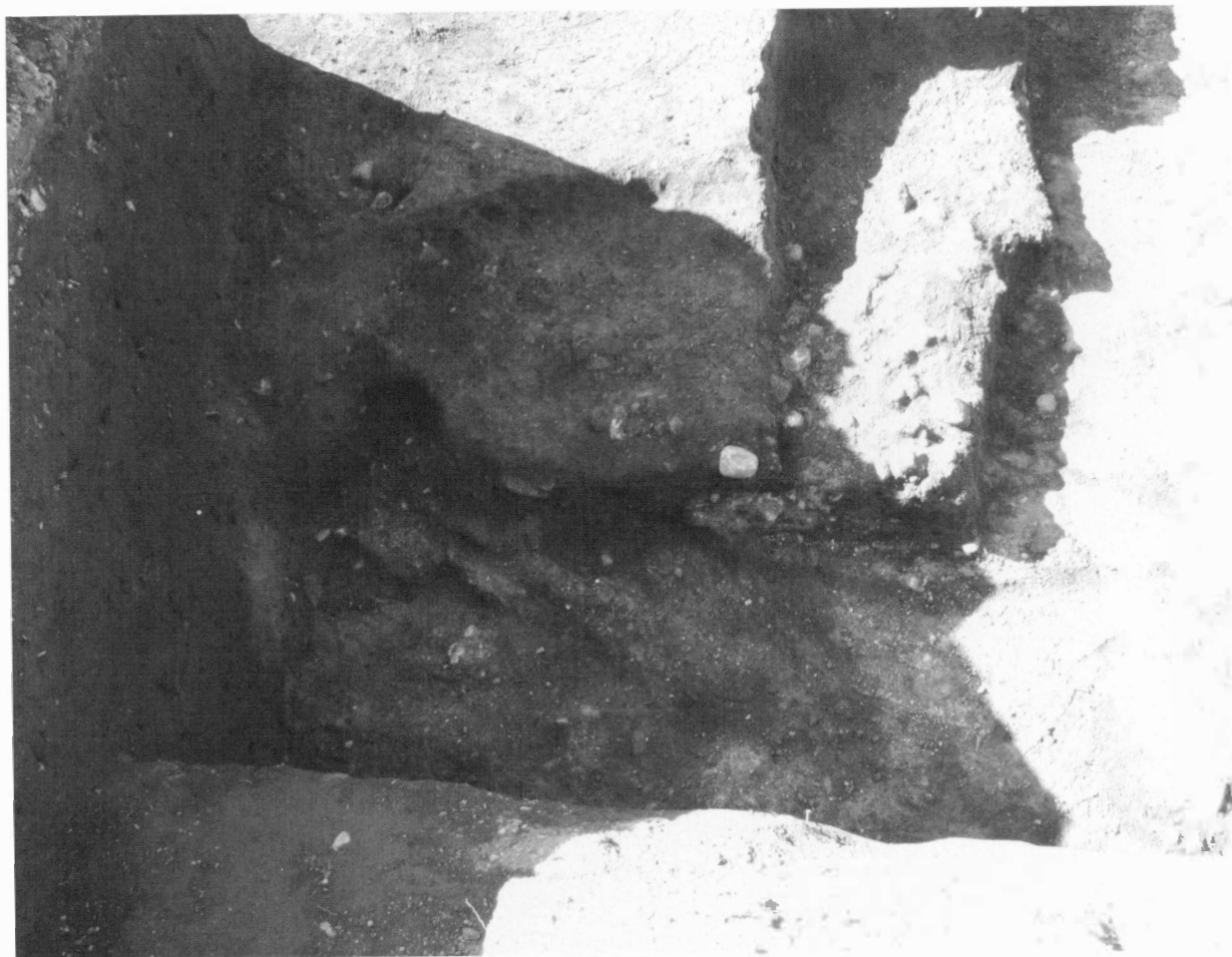
1SI50 カマド遺物出土状況（東から）



1SI50 カマド検出状況（東から）



1SI50 カマド袖部土層確認状況（東から）



1SI50 完掘状況（東から）

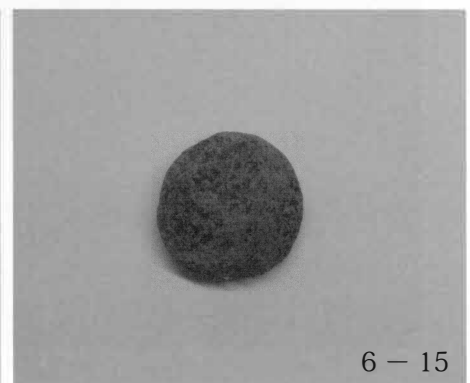
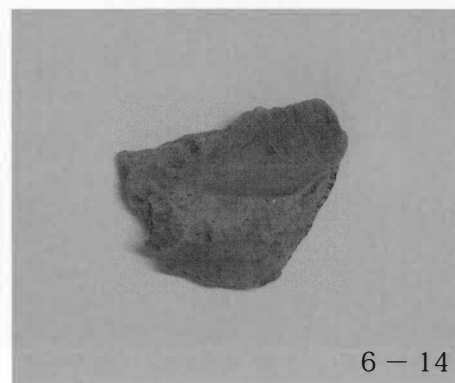
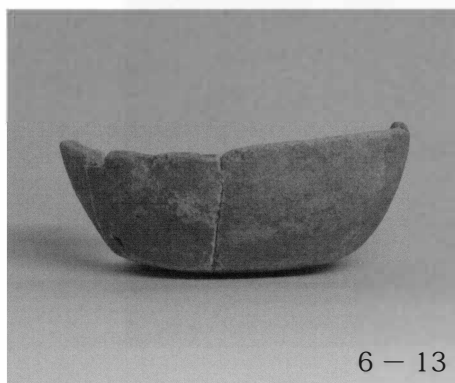
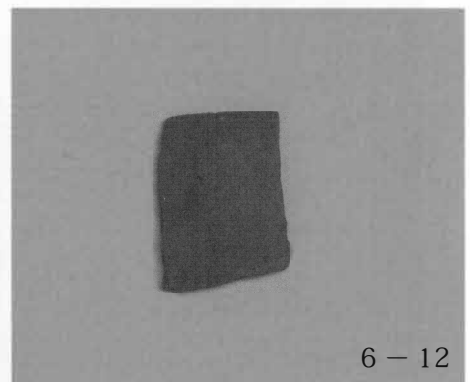
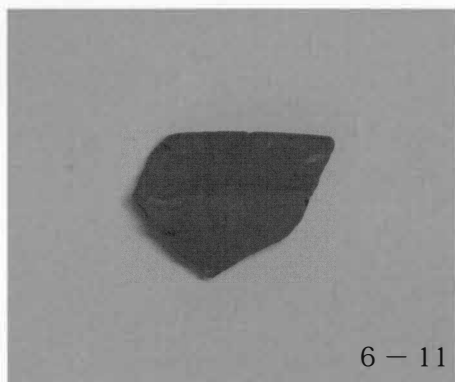
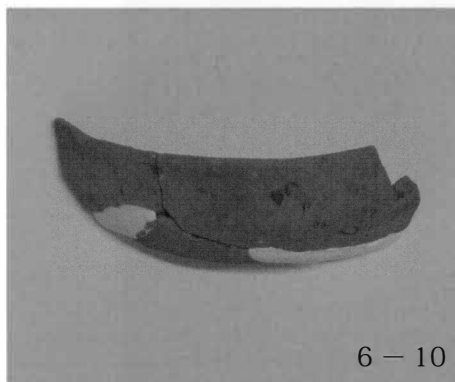
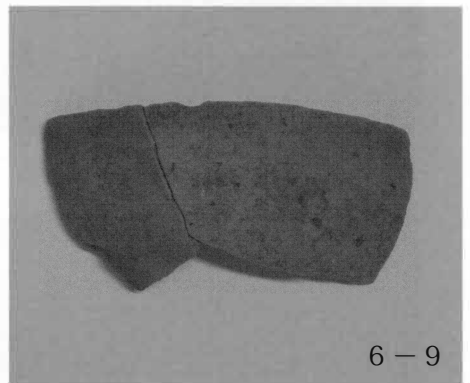
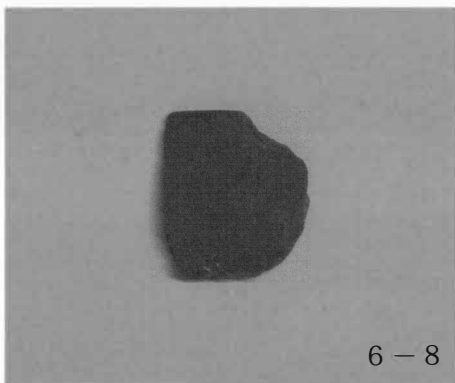
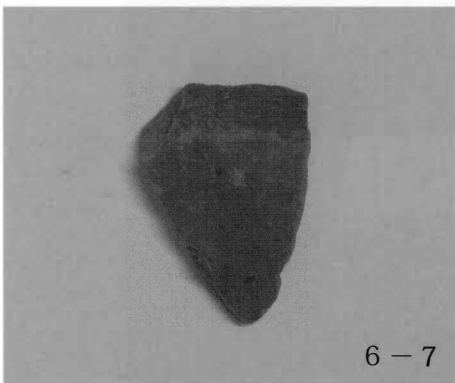
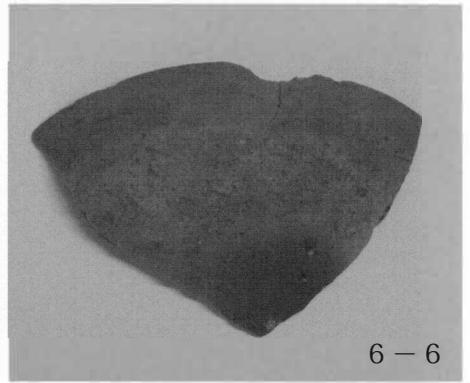
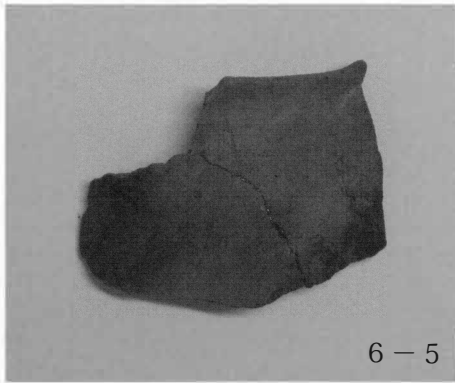
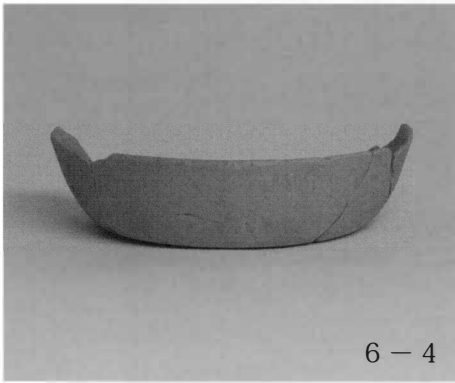
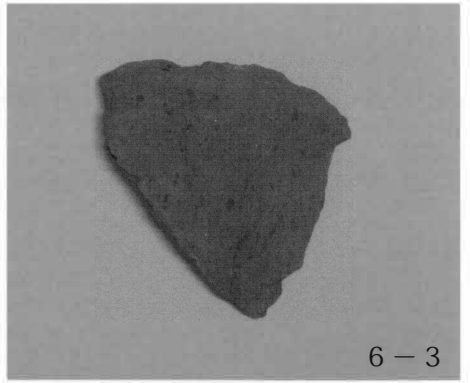
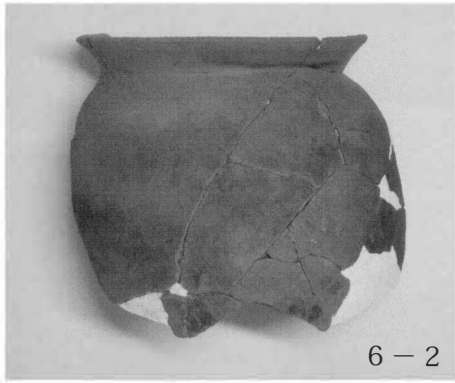
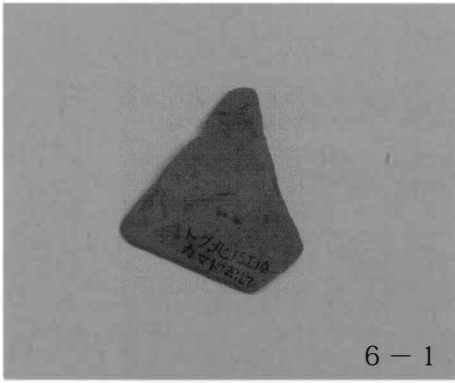


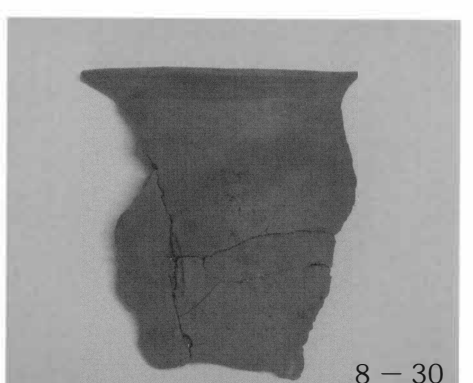
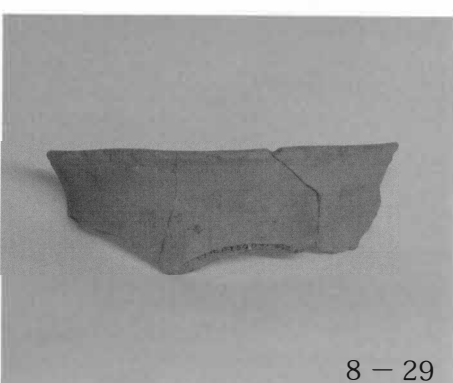
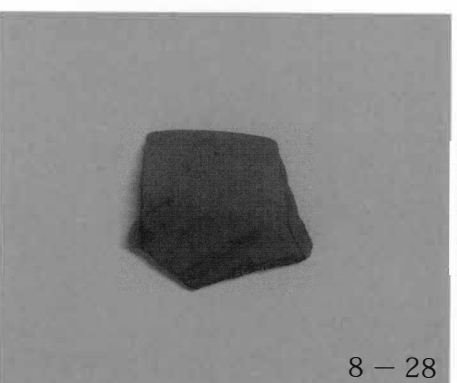
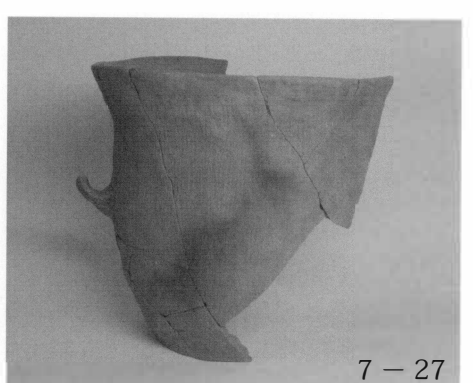
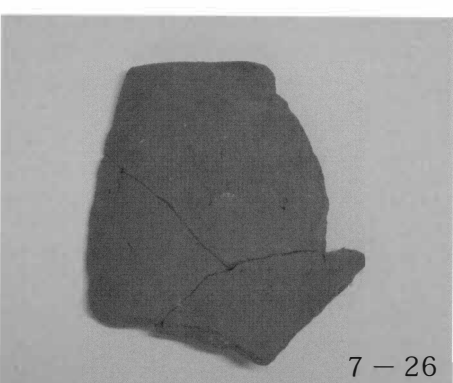
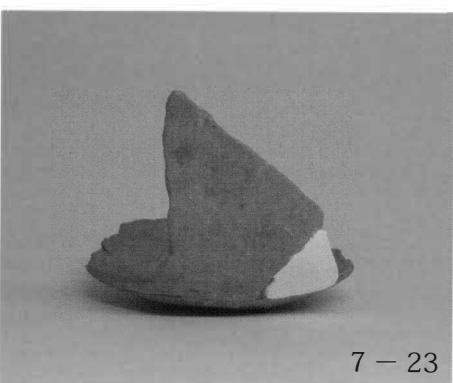
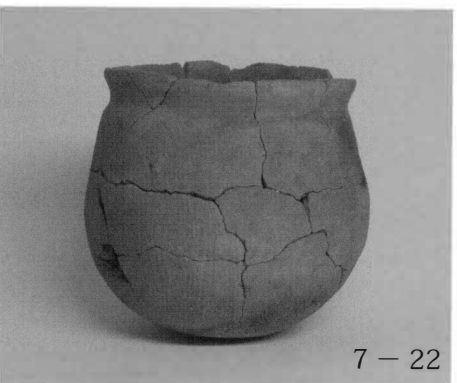
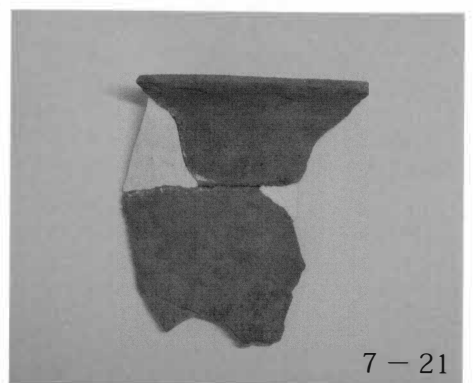
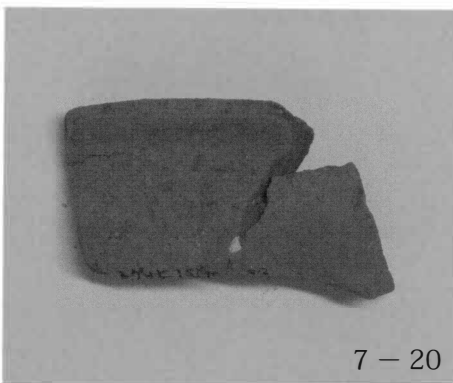
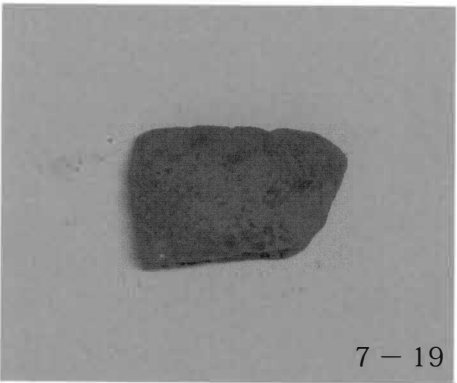
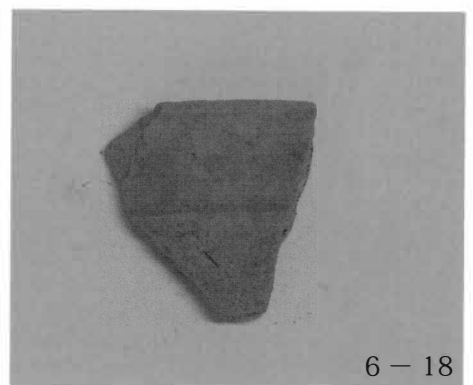
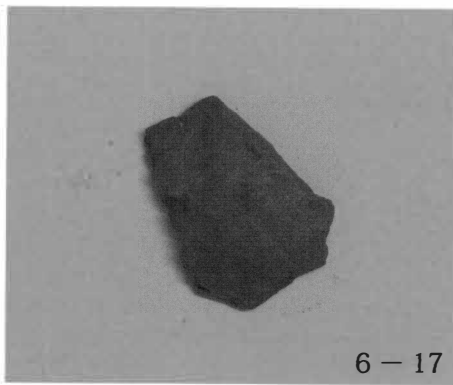
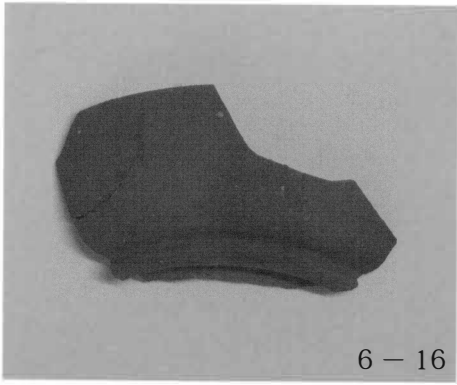
1SD01 北側面土層確認状況（南から）



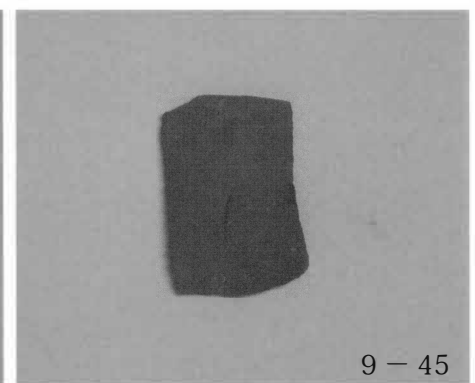
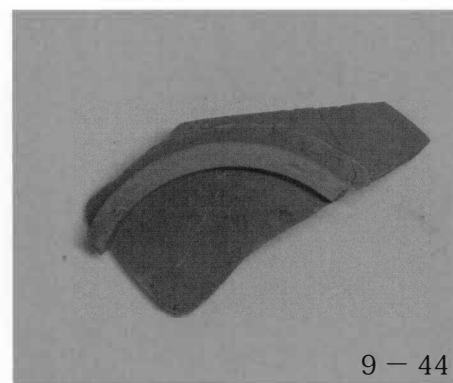
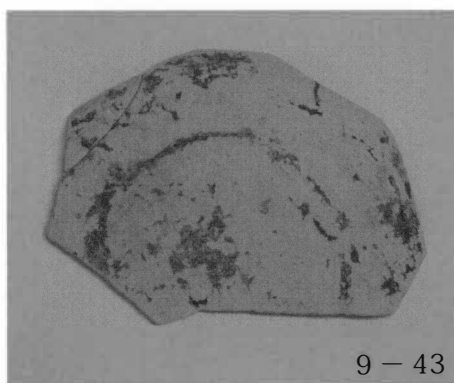
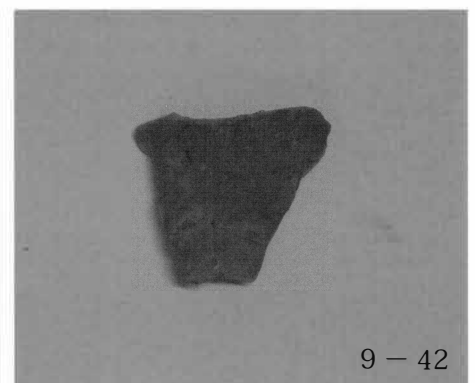
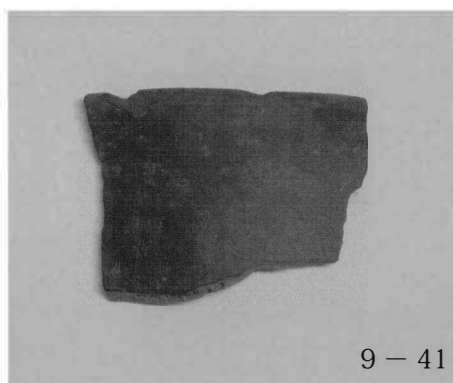
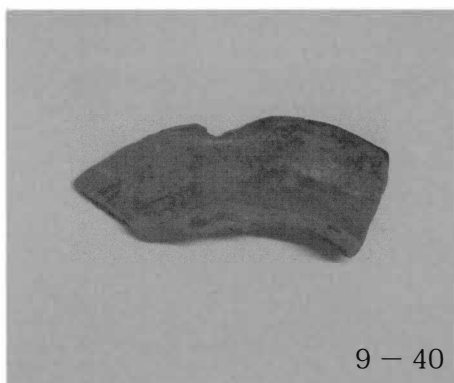
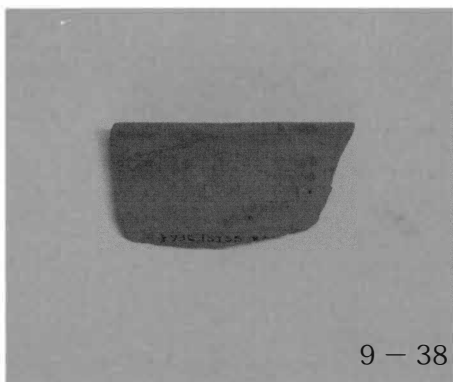
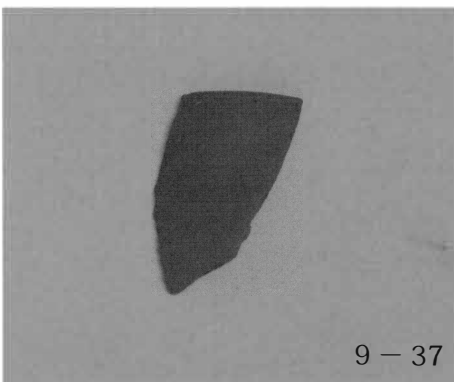
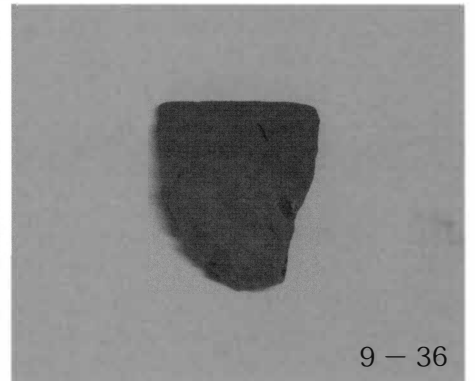
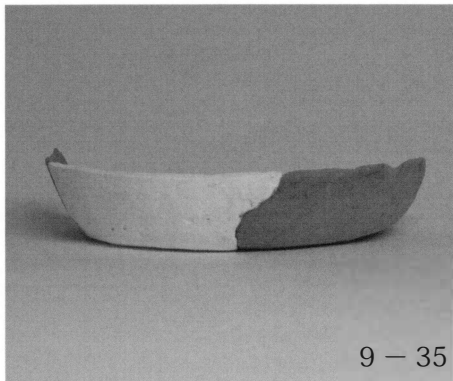
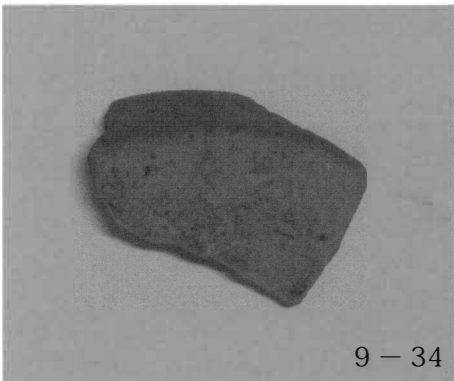
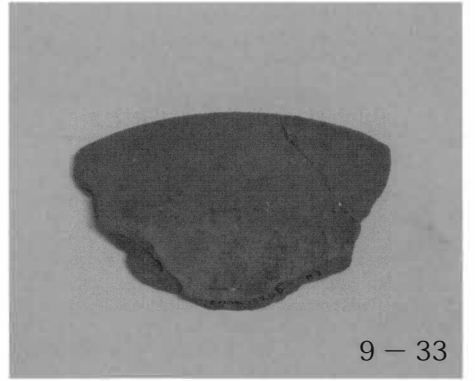
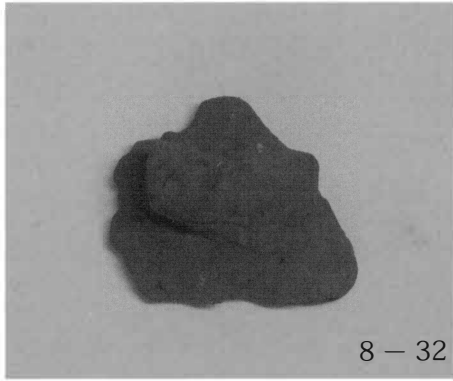
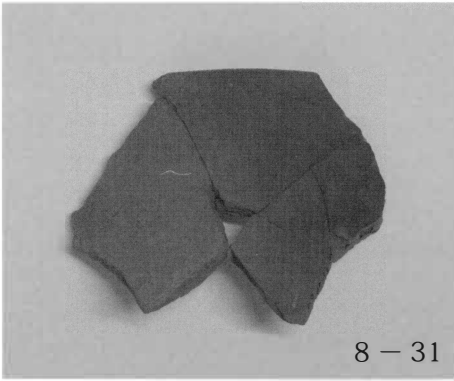
1SD01 中央ベルト土層確認状況（南から）

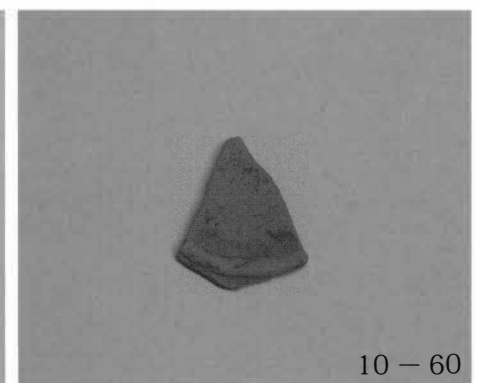
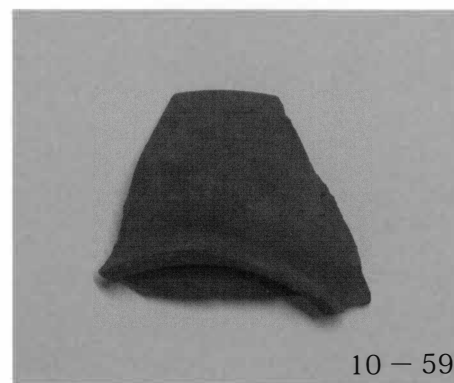
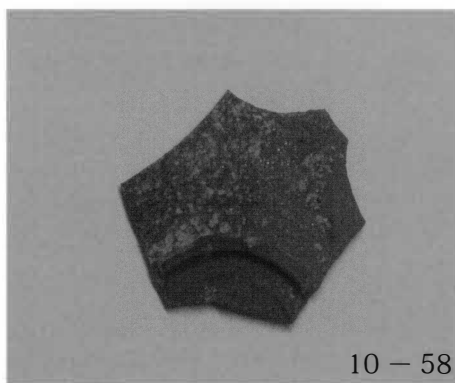
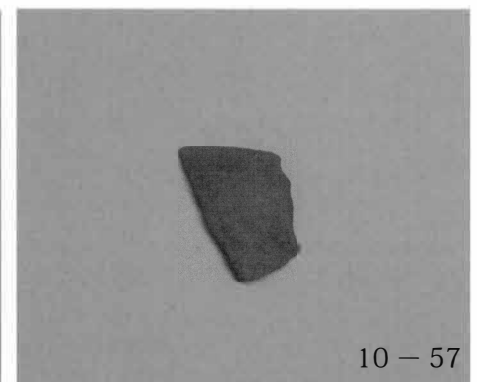
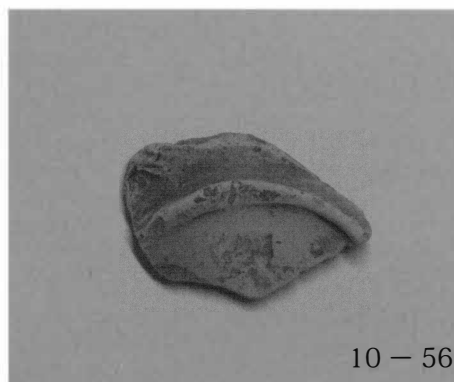
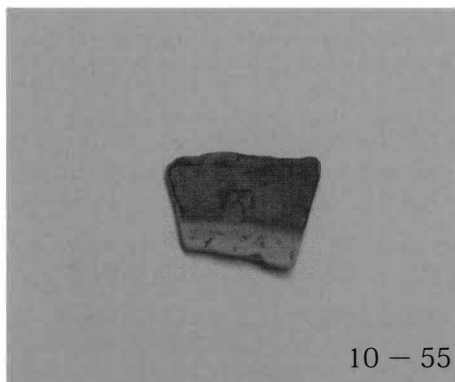
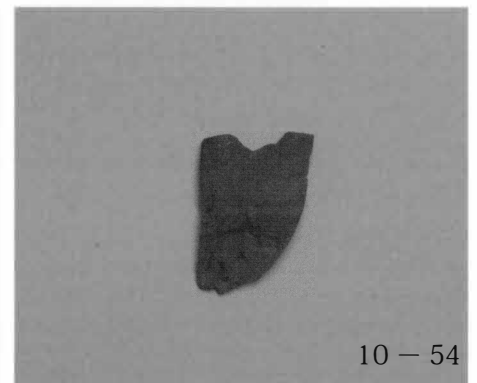
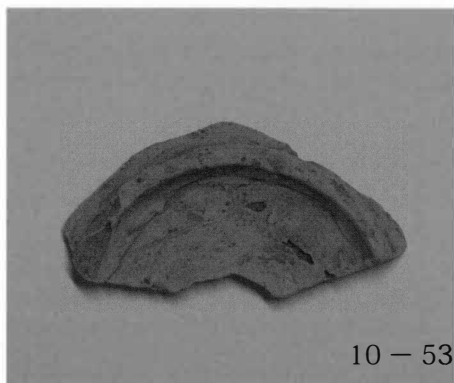
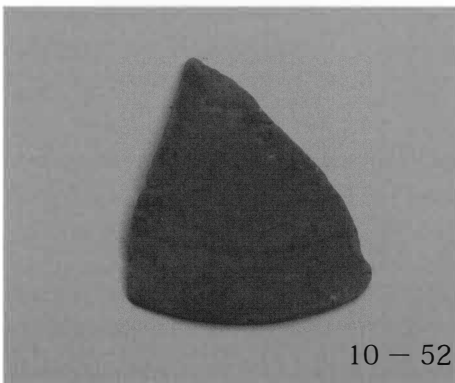
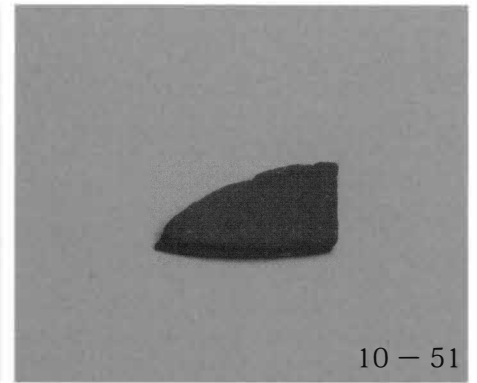
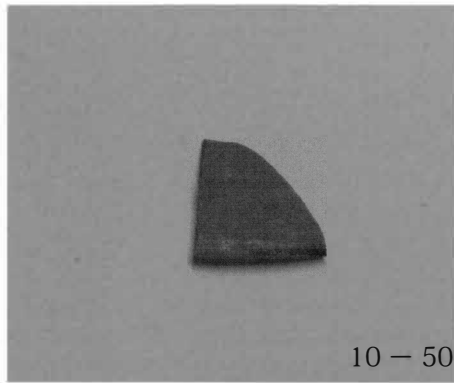
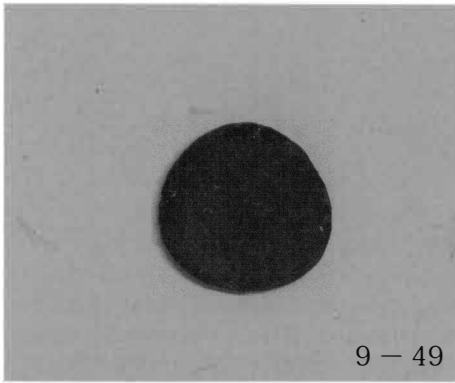
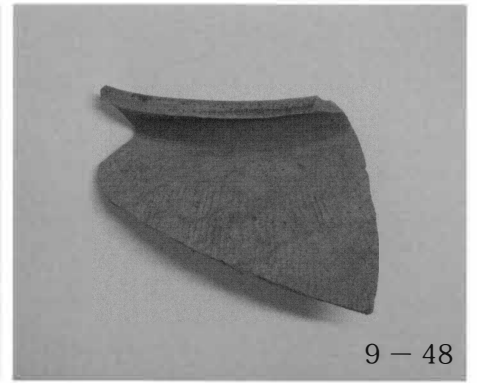
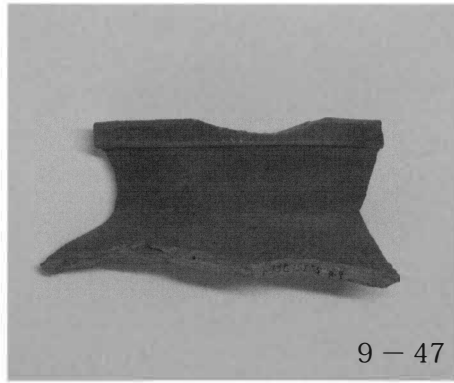
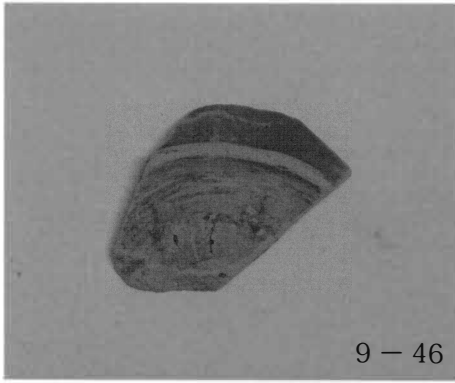
Pla 10



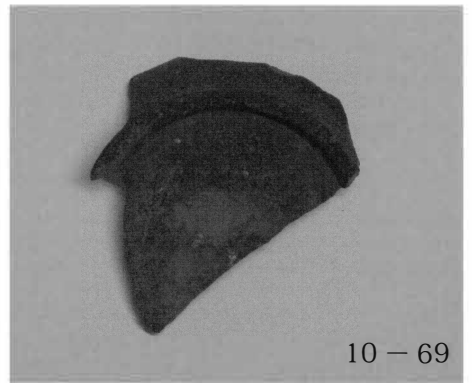
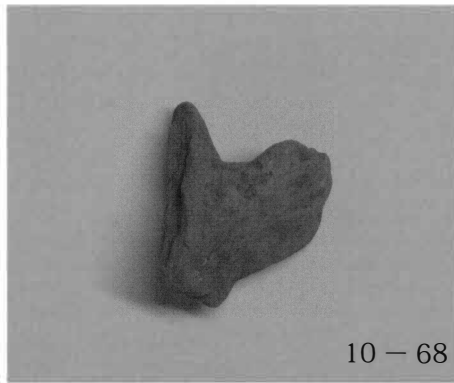
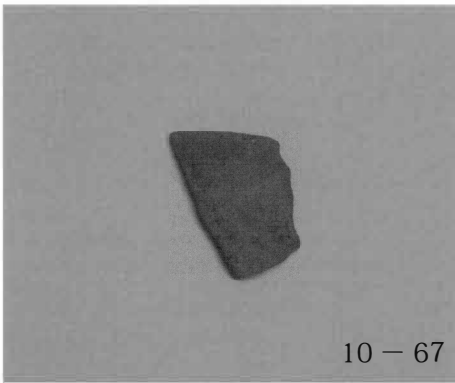
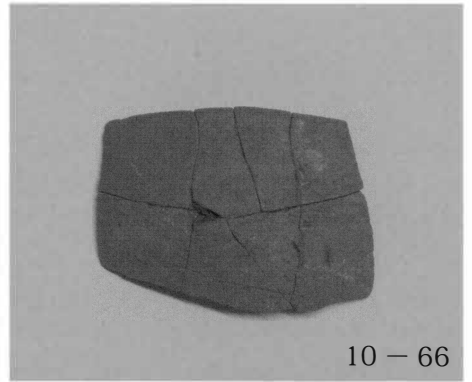
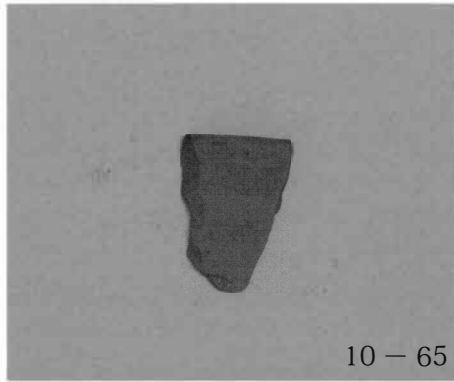
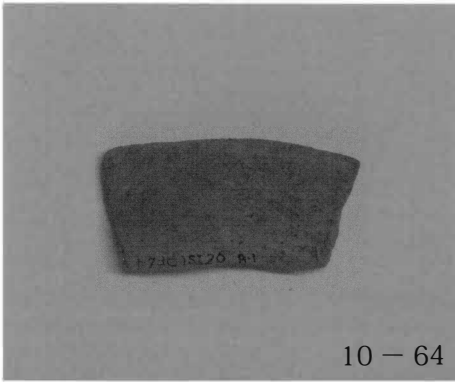
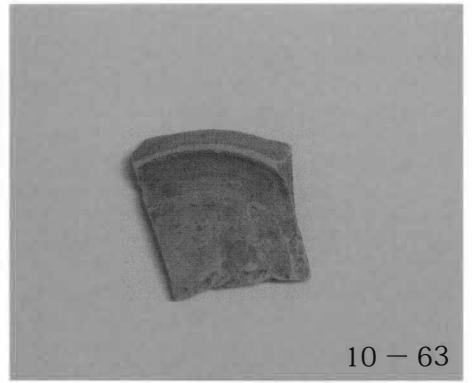
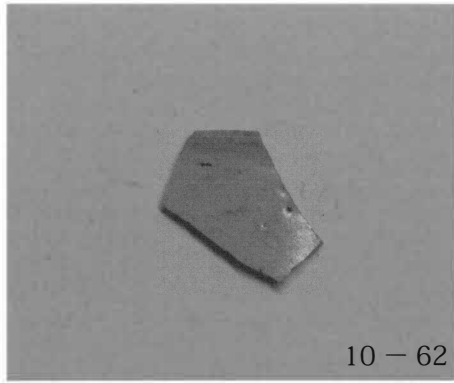
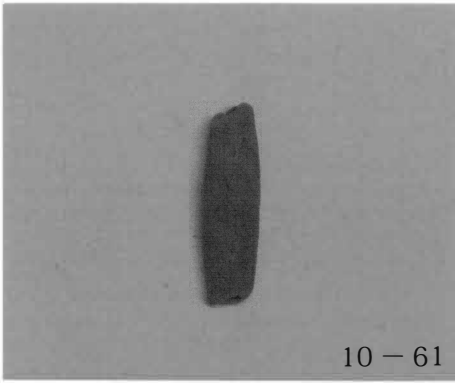


Pla 12





Pla 14





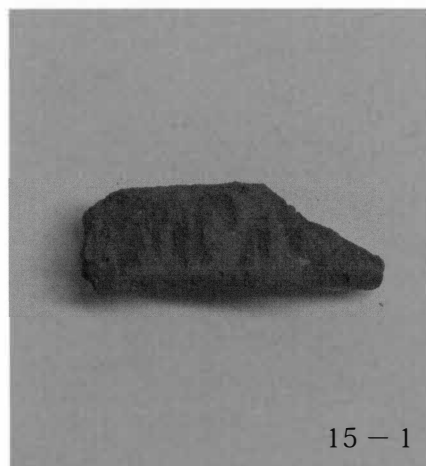
山ノ井南野遺跡第7次調査 調査区全景（南から）



山ノ井南野遺跡第7次調査 SD1（南から）



山ノ井南野遺跡第7次調査 SD1 土層観察（南から）



筑後市文化財調査報告書 第98集

筑後市内遺跡群XIV

平成23年3月31日

発行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井 898

TEL 0942-53-4111

印刷 大同印刷株式会社

佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20

TEL 0952-71-8520(代)